

# 関山

かんざん

第6号



寺報 中尊寺

時報ぐらびあ	
重文騎師文殊菩薩および眷属像の修理完了	5
「ひかりの饗宴」	貫首 千田 孝信 6
「中尊寺と茂吉、白秋」	渡辺 皓介 8
西行祭・短歌講演録「歌の表現」	河野 裕子 13
「歌は主観の表現である」	加藤 克巳 26
「中尊寺ハス」余話	佐々木邦世 42
「中尊寺ハスと二つの俳句」	荒木 清 44
新知見と「結論」	中尊寺仏教文化研究所 46
季語に寄せて	49
聖地五臺山随行記 抄	菅野 宏紹 62
中国房山石経回藏 ルポルタージュ	菅原 光中 72
研究／出版	74
風信／語録	75
帯木と老僧 菅野澄教師〔誌上鼎談〕	78
陸奥教区宗務所報	80
執務日誌抄	84
新讀衛藏建設工事記録	103
浄財御奉納者御芳名	109
不動尊篤信御奉納者御芳名	110
新讀衛藏建設浄財寄進結縁御芳名	111
中尊寺開山千百五十年祭 趣意書	116

〈表紙〉

中尊寺新能「頼政」塩津哲生師

面は「三日月」中尊寺藏（東條睦子・撮影）

〈扉〉

「中尊寺ハス」(三浦高信・撮影)

甦る「中尊寺ハス」(大池跡)



実のとんで 時空をとんで 蓮開花

あらき みほ

(「花鳥来」「屋根」同人)



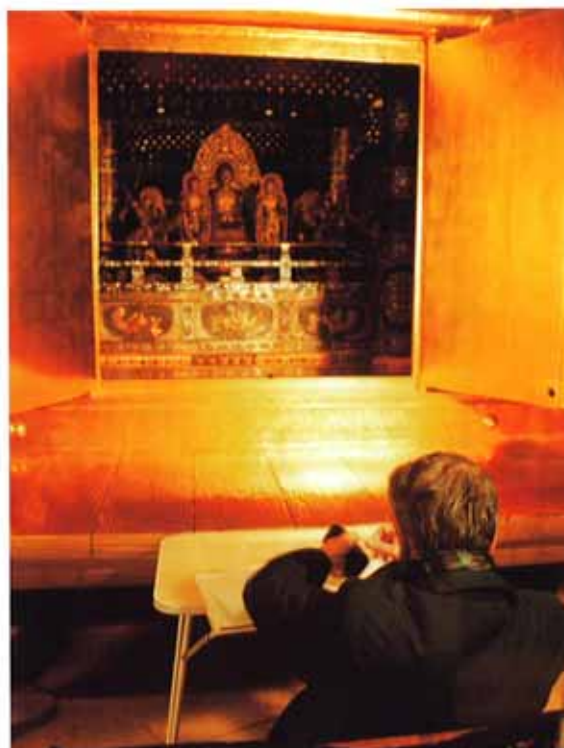
法華經一日願写經会 六月十三日  
紺紙金銀字交書法華經(如来寿量品)一巻 奉納



同 奥書  
東京/新倉禾亭氏と門弟の書写になる



軸頭 平泉/鈴木正人・彫金奉納



平山郁夫画伯 山内をスケッチ  
五月十六日





重文  
騎獅文殊菩薩および眷属像の修理完了

経蔵（重文）の本尊・木造騎獅文殊菩薩像及び脇侍像は、金字一切経の書写底本として施入された宋版一切経の守護尊として造立されたものと思われれます。中国五台山に化現したという五台山文殊五尊像のわが国最古の遺例です。

この五尊像については、鎌倉時代以降に流行した玉眼使用の早い例とされてきたようですが、最近の調査の結果は、後補の際のものに見なされます。江戸から明治期にかけて修理された形跡もありますが、五尊像ともに肉親部の金泥・彩色が風化・剥離・剥落・変色が進み、尊容を損ねておりました。岩手県教育委員会文化課及び文化庁文化財保護部美術工芸課と協議の上、平成十一年度の二カ年の国庫補助事業として(財)美術院で修理されました。

文殊像は主に肉身部の金箔が剥落して弁柄下地が露出していたので金泥彩で仕上げ、四脇侍像は肉身部の彩色を一度除去し、改めてその部分に彩色を施しました。師子には全体に金箔を押ししてありましたが、今回の修理では後補の箔を落とし、摺り漆でもって全体に古色仕上げにして、一切経の守護尊にふさわしい尊容を甦りました。

修理完了した五尊像は、明春四月一日、新讀衞蔵落慶開館にあわせて公開されます。

(破石澄元)



第二十三回中尊寺薪能 八月十四日  
能「頼政」(塩津哲生師) [表紙]  
能「鉄輪」(佐々木宗生師) 上  
狂言「三本柱」(野村万作師・萬斎師) 下

# ひかりの饗宴

御修法に列して

貫首 千田孝信

比叡山延暦寺、根本中堂の暗い内陣の高みに、不滅の灯し火が幽かに瞬いている。あたり一面に、千二百年の歴史が湛えられているのがわかる。結果は専ら寂静のたたずまいで、衣擦れのわずかの音さえも憚られる。

寒冷の薄明のなか、お座主の渋いお声の表白が終わると、唱礼師がいちだんと高い音律で供養文を朗々と唱え、唱礼が始まる。式衆が一齐に唱える声明が、石畳と高い天井に反響して、結果の闇にのちが動きだす。作礼・出罪・随喜・勧請・廻向の唱礼のたびに、式衆は立上がって「帰命頂礼大悲熾盛光仏」と唱えつつ深々と礼拝する。手足の指先が冷たい。

声明の旋律がリズムカルな拍子に変わって、諸天を讃える段に入ると、修法は七十の諸天に捧げる伝供に移る。小さく固めた御飯に立てた蠟燭に、ひとつひとつ順送りに灯が点される。お座主が御供を掌に捧げて、鄭重にご加持を加える。これを八名の式衆が厳かに両手移して伝送しながらご本尊に捧げる。その数七十余り。結果は、次第に光りの渦の流れに揺らぎはじめる。あまたの蠟燭の光りが闇のなかに燦めく光景は、喩えようもない荘厳さである。まさにこれはひかりの饗宴である。

灯し火が立並ぶと、本壇の左右で十二天供と護摩供が修されて、結果は眩いばかりとなる。式衆は、ご本尊熾盛光仏のご真言を唱え始める。

なまく さまんだぼだなん あはらちかたしや さななん おん  
きやきや きやきやきやき うんうん ……

ひたすら数を繰る。繰り返しによって身につく。自然に口を衝き身についた真言になって、はじめて真の言になり、身に験の力が宿るのである。

左の奥座、勅使の奉安による玉衣の前にお座主が坐られ、「天皇陛下 玉躰安穩」のご発音で、式衆はこれに唱和する。さらに、祈念は深く、「天下泰平」「万民豊楽」に及ぶ。修法の功德を、上は万乗から下国民のすべて、天地のひろがりに廻らす丹誠の祈念である。

石畳に坐って、ゆるやかに修法の成就を祈る能陀羅尼を唱えると、突然、一切の行事が終わって退堂となる。すべての灯が消える。根本中堂は、再び千二百年の静寂に戻って、不滅の灯し火だけが、宗祖の熱い祈りを瞬きつづけている。

総本山比叡山延暦寺が、天台座主猊下を大導師とし、五箇室の御門跡をはじめ一門の長脇十六名を選んで、玉躰安穩と天下静謐を祈念する延暦寺伝統の法儀。毎歳、四月四日から十一日までの七日間、一日三座・併せて二十一座を精進齋して修する御修法の行事である。今年の秘法は熾盛光大法。熾盛光仏は宇宙に燦めきわたる熾盛な光り、一切の魔障を消滅する霊力が尊い。

世ばなれした古い儀式と、人は思うかもしれない。しかし、何故か涙が胸に溢れてくるのだった。師匠の亡き父も天台の末弟として夢みた台密最高の密儀。中尊寺貫首としての有難い仏縁を頂いて、初めて修し奉った感動の御修法だったのである。

# 中尊寺と茂吉、白秋

渡辺皓介

斎藤茂吉は一九三二年（昭和六年）に、北原白秋は一九四〇年（昭和十五年）に、平泉中尊寺に來遊している。このとき茂吉は四十九歳、白秋は亡くなる二年前で五十五歳だった。

茂吉が平泉を訪れたのはその年の十一月のこと、十三日に長兄守谷廣吉が死去したので、当日輝子夫人と共に東京を発ち、十五日に葬儀に列した。そのあと、鳴子温泉、平泉、松島、塩釜を経、二十二日東京に戻っている。

平泉をたずねたのは十六日から二十一日の間ということになるが、年譜を見てもその日を特定できない。

この折の中尊寺來訪は、茂吉に深い感銘を与えたようである。そう思うのは「中尊寺行」として二十首もの短歌を詠じているからである。そして

詠嘆はことのほか深いものと読みとれるからである。十首を抜いて次に掲げる。

- ・ 水上へとほくきらへる北上川の流かはりてよ  
り年は古りにき
- ・ 妻とふたりつまさきあがりへのぼりゆく中尊  
寺道寒さ身に沁む
- ・ 旅とほきおもひこそすれ金堂のくらがりにき  
て触りて居れば
- ・ 日は晴れて落葉のうへを照したる光寂けし北  
国にして
- ・ 義経のことを悲しみ妻とふたり日に乾きたる  
落葉をありく
- ・ 金堂は遠世ながらに年ふりぬ山の火災もここ  
に燃えねば
- ・ いまの現のごとく悲しみにしへの此処に滅  
びし人をおもへり
- ・ ここに來てわがこころ悲し人の世のものはう  
つろふ山河より悲し
- ・ あまそそりはつかに雪の降りける山いつく  
しと北国ゆくも

・ 向うには衣川村ありといふ亡びぬるものはと  
ほくひそけし



斎藤茂吉

「中尊寺行」は、昭和六年、七年の作を収めた第九歌集『石泉』に入っている。「後書」で茂吉は「（昭和六年の歌は）おおむね平凡な歌であって、句の上などに奇抜な工夫などが無いようであるが、写生の比較的眞面目に出来てゐるものも交じってゐるようである」

と語っている。しかし、これらの歌にはいわゆる「茂吉調」の、格調のたかい、寂寥感に満ちた作が幾つも見られると思う。紙数の都合で二十首す

べてを紹介できないのが残念である。

白秋が平泉に來遊したのは昭和十五年六月のことである。「五月雨の平泉探勝は私のかねての念願であった」というから、病気をかかえての旅ながら、気持ちは晴れやかだったにちがいない。

六月九日菊子夫人を伴ない、仙台で催された「多摩」の東北大会に出席した。そのあと、塩釜を経て松島に向い一泊。翌十日は朝から瑞巖寺、五天堂、観瀾亭などを観て、再び巡航船で塩釜に着き、汽車で平泉に向う。瀬峯で乗り換え築館に着く。築館では黒沢氏の新居に宿泊した。

翌朝、隣り町の一迫は柳河と同じ水郷であると聞き、東道の齋藤氏宅に向う。齋藤氏は、白秋の著書を初版本から蒐集されている蔵書家だという。

黒沢氏、齋藤氏がいかなる方々であったか知る由もないが、ご存知の人があればご教示を得たく思う。当時宮城県には「多摩」の同人、会員が多かったようである。

こうした詳細がわかるのは、白秋自身の文章「初

夏東北行」があるからである。この紀行文は『薄明消息』（昭和二十一年アムス刊）に収められているが、白秋が書いた昭和十年六月から、昭和十七年八月までの文章の中から、旅行記だけを選んで木俣修が編集したものである。

紀行文はいずれも、大らかでのびやかな白秋の氣質があらわれていて楽しい読みものだが、地元の人間にとってみると、小さな思いちがいや見まちがいに気づくことがあって、それがまたおもしろい。

「達谷の巖から毛越寺に回つて、初めて私はその静寂と、古の典雅とに触れ得た。平かで豊かな規模の中に池が湛へ木立と堂宇が今にもしずかに残されてあつたのだ。一関から中尊寺の坂下に着き、さまで急でもなかった勾配を病中の私はたどりと登つたが……」

白秋はこう書いているのだが、これでは毛越寺を見たあと、一関から中尊寺へ向つたと読める文になっている。

さらに「月見坂」を「さまで急でもなかった勾

配を」と言っているが、これは「病中の私がかたどたど」と強く印象づけるための表現であろう。健康人にとつてもあの坂は「さまで急でもない勾配」とは言いにくい。

平泉行に同行したのは、菊子夫人、巽聖歌、岩間正男、そして地元の黒沢、上坂、鈴木諸君、それに齋藤甫氏とその令嬢、とある。おそらくこれらの人たちが手を貸し、からだを支えて坂を登つたであろうことは、想像に難くない。

白秋は前年、左眼に三度目の眼底出血をしている。自ら語る「詩業四十年に亘る健康に委せての無理押し」が、高血圧、糖尿、腎臓などの病患を招いたのである。それが眼の疾患の原因となつたのである。

さてその日は、拝観の時間も過ぎてしまったので、老僧の厚いもてなしを受け、本坊に一泊する。「この山に目を醒まして感じ入つたことは、郭公をはじめ野鳥のこゑのしきりであつたことである。富士の須走で聴く群鳥の声よりも繁く、郭公は無論のことであるが、澄み徹つた黒鶏の声のう

つくしさはまたなきものと聴いた。

宝庫、金色堂の結構はさることながら、野菊の花に包まれた山蔭の小さな堂宇の閑寂さはまたひとしほであつた」

黒鶏とはクロググミのことである。いかにも白秋らしい澄明でずるな文章である。

このあと、白秋は花巻に行き一泊する。次の日の朝、巽聖歌が郷里日詰におもむき、老母に会つ



北原白秋

てくれるよう懇請する。

老母を白秋に引き会わせた聖歌は、「涙ながらに謝辞を述べるが、白秋は自分を師として虔敬する

心の厚さと孝心に、深く感銘している。

「東北行」は六月三十日に書かれた文章であるが、結びの數行は次の通りである。

「中尊寺の仏像の中で、今も眼前に匂つてゐるのは宝庫の人肌観音の面持と、金色堂の傍立ちの勢至観音、岩間君にちよつと似てゐる持国天の怒つた横顔である」

この旅に同行した岩間正男、鈴木孝輔、巽聖歌が、名だたる歌人、詩人として名をなしたことは、みな人の知るところである。

この旅で白秋の受けた感銘は「金色堂を思ふ」の短歌四首に結晶した。歌は十二月二十七日に作られ、歌誌「多摩」の十六年一月一日号に発表された。

金色堂を思ふ

・冬ごもりひと日のすゑはおもほえて金色堂の影も顯つかに

・閑かさは金色堂の庭にして湧井の桶口水滴りにけり

・光堂黄金かがよふ冬ありて澄みつつかあらむ

我はおもほゆ

また

・金色堂み雪ふりつむ鞘堂の内幽かにか黄金ひ  
びらぐ

これらは歌集『牡丹の木』に収められている。いつの日か斎藤茂吉の二十首、北原白秋の四首から一首ずつが選ばれて、「アララギ」系の人々、「多摩」系の人々の手によって歌碑が建てられるならば、中尊寺を訪れる遊子の旅情は、さらにも深まるにちがいない。

(写真・『新潮日本文学アルバム』北原白秋、斎藤茂吉より)



金色堂 旧外観

## 講演 「歌の表現」

河野裕子

ただいまご紹介いただきました河野裕子です。昨日京都からまいりました。岩手といっても案外近いんですね。岩手は私たいへん思いの深いところでありまして、二十六年前に新婚旅行で来ました。中尊寺のあの参道を登ったことを、よく覚えております。五月の十日日だったと思うんですが、藤の花が咲いてとても綺麗で、寒かったですけれども、そういう思いの深い岩手にこういう形でまた来ることができて、とても嬉しいのです。

なんで新婚旅行に岩手を選んだかといえますと、私は宮沢賢治がたいへん好きで、本当に宮沢賢治が好きで、宮沢賢治が描いてみせてくれた岩手の風土、それから岩手の言葉、そしてあの不思議な面白い世界ですね。言葉の世界、そ

ういうものにずいぶん子供の頃から惹かれて、いつかはきつと岩手に行きたいものだなあと思っております。それで新婚旅行では、一関に泊まって中尊寺に、それから花巻温泉にも、小岩井農場にも行きました。また来られたら、次はいつ来られるかなあと思ってお断じますと、これから二十六年経つと、私は幾つになるか(笑)、もう七十八ぐらいになるんじゃないかなあ——。

西行という歌人は、たいへん面白い歌人だと思います。最も有名なのは

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

命なりけり小夜の中山

ですね。あの下句の「命なりけり小夜の中山」というあの響きのよろしさというのは、もう大したものだと思います。意味がなくても「命なりけり小夜の中山」と言うことによって、歌のリズムが見せてくれる、つくっていく、あの思いの深さ、丈の深さというものは、なかなか比類のないものではないか。そういうように西行といえば「小夜



の中山」であり、桜の歌と、一般的には思われているわけでありませうけれども、私はちょっと違った角度から、西行の歌はたいへん面白いなあ、というふうに読んできました。

いま、ここに例歌として四首ばかり挙げてまいりましたけれども、こういう作品であります。

#### 西行

古畑の岨さへの立木たつきにゐる鳩の

友呼ぶともよこそ多のたすぎ夕暮 『山家集』

これを読んだ時に、たいへんびっくりいたしました。古典和歌とは全然違う顔をしているわけですね。古典和歌ならもう少し流麗な調べであり、もう少し情緒のある場面を歌い出すはずなのにすけれども、この西行の歌は、もうその辺から全然外れてしまっている。

どこが外れているかと言いますと、まず「こそすぎ夕暮」という、「すぎぎ」という言葉を使っている。古典和歌の中で「すぎぎ」という言葉を使った歌は、あんまり見たことがないのですけれども、もう八百年以上も昔に、こういう言葉

で歌をつくっているというのは、なんだろうと思いました。

それから、私はこの歌の意味がよくわからないのです。読めば確かにそうなんです。古畑の岨さへというのは、切り立った斜面でしようか、「古畑の斜面のところ」に木が立っている。そこに鳩がいて、それが友を呼んでいる、その声もものすごいんだよ」と言ってるんですね。まったく意味的にはそうなのでありますけれども、果たして、こういうことを詠むことによって、西行は一体何が言いたかったんだろうかと思うと、わからない。本当にわからない。たいへんすごい歌だとは思いますが、ぞっとする、とは違う。恐ろしいとも違う。一つの世界をもっていたあの古典和歌の時代に、なんで、こういうような言葉を選んで、こういう場面を一首の中に定着したのだろう。西行は一体何を考えたんだろうかと、たいへん不思議なものです。

「すぎぎ」という言葉は、今では皆さんよく使われる言葉なのですけれども、言葉の本来の意味



からいいますと、雪とか風とかが冷たくて、それが身にしてみる、身にこたえる感じ、それを「すぎぎ」と言ったらしくて、その「すぎぎ」が人間関係の冷たさなどを言うような形容に使われてきて、そしてだんだん時代が下ってくるに従って、

「ものすごい」とか、「ああすごい」とかというふうに、今では簡単に使えますけれども、言葉本来はそういう意味だそうなんです。ともかく、そういうぞっとするような思いをさせるような声で鳩が鳴いている。喧嘩をしているのではなくて、友達を呼ぶ時にそういう声で鳴いているんだという。しかも場面が斜面でありまして、斜面というのはたいへん人間の心に不安な感じを与えるんですね。斜めの構図が人に与える不安な感じ。そういう歌一首の中のいろいろな構図や言葉の選び方、そして素材の置き方などを考えて読んでいきますと、この歌はたいへん面白いというのか、特異な感じがいたします。古典の和歌の中で、この歌を置いてみると、非常に変わった顔をしている。それから、ちょっと感じが違いますがすけど、

うらうらと死なんずるなと思ひとけば

心のやがてさぞと答ふる

一読しただけではちよっとわかりにくいのですけれども、「うらうらと死なんずるな」というのは、うらうらとした、うらかな気持ちで死のうというような意味でしょうか。「思ひとけば」というのは、理解の「解」です、思ひが解ける。思ひ解いたところ、心がやがて「そうだ」と答えたというのです。うらうらとした心で死のうということだなあと、問題を解くように思ひ解いたところ、心がやがて「そうだ」と答えた。たいへんこれも古典和歌らしからぬ歌でありまして、面白いのです。内的な対話、内面の対話といましようか、私の中のもう一人の私が、「そうだ」と答えたというような、心の中で自分が何人かいて、そのもう一人の自分が、「ああ、そうだ」というふうに答えてくれた——。客観的といふのか、自己相対化といふんですか、そういうような心の不思議な働きというものがある。あの時代に、こういうような形で短歌の中で歌いとめている。これも内

省的というよりは、ある哲学的な命題を含んだような歌い方をしておりまして、これも、西行という歌人が決して桜とか「小夜の中山」だけの歌人ではなくて、いろいろな面を持っていて、そしてそういういろいろな心の面を、歌の中で表現でき得るだけのものを持っていた歌人である、ということではないかと思えます。

私は、この歌もとても不思議な歌だと思うのですね。こういうような心の働きを散文の中で表現すると、ずいぶん時間がいられます、紙もいるし、回りくどい説明がいりますけれども、たった三十一音の中で表現してみると、たいへん凝縮されまして、短く言うことによつて、むしろ本質を突くことができる。そういう短歌の本質というものを思うわけです。

三首目の、

小山田の庵いほ近く鳴く鹿かの音に

おどろかされて驚かすかな

『新古今集』

この歌の場合も、「おどろかされて驚かすかな」

なんて、たいへん俗な感じでつくっている、そこが面白いと思いました。

この歌の意味というのは、言えばすごく簡単なことなのでして——、よく鹿が出て来る、その鹿が害をする。「庵」というのは、鹿の見張り小屋のことなんだそうできて、鹿が出てきたら追ひ払い見張り番がいる小屋のことです。そこで見張っていると鹿の鳴く声がある、ぎょっとする。びっくりして、追ひ払いおもうと思って板なんかを鳴らしながら、鹿を驚かしたよという、意味はそれだけの歌なのですが——。雅な世界を歌うのが和歌であるというふうな、一つの暗黙の了解があった時代に、こういうような賤の人達ができるようなところで歌をつくっている。それだけではなくて、表現が「おどろかされて驚かすかな」なんて、現代短歌で使っても全然変でないような言葉を使って歌をつくっている。そういう自在さというのか、八方破れといえますか、あんまり型にはまらないところが西行の面白いところだなあと思うわけなんです。

前の二首が『山家集』の歌なのでして、三首目が『山家集』にも入っておりますし、『新古今集』にも入っております。そして次は、

あはれみし乳房ちちうでのこともわすれけり

我がかなしみの苦のみ覚えて

『聞書集』

この歌は、詞書かなんかがあって、地獄絵を見つづけたんだという。男女のたいへん官能的な場面を歌にしているのではないかというふうに思うんですけども、私かなんでこの歌を選んできたかといえますと、「乳房」という言葉を使っているからなのです。

以前に、一度調べたことがありますが、記紀歌謡から与謝野晶子の明治まで、女性が自分の肉体を歌った歌というのは、ほんとにありません。大國主命の妻問いに答えて、沼河比賣ぬまがはひめが自分の乳房を淡雪のように白い豊かな乳房であるというふうに歌っているのが、『古事記』歌謡にあります。それを最後に、明治の与謝野晶子が出てくるまで、女性が自分の乳房を歌った歌は、一首もないと断

言してもいいぐらい、ありません。自分の肉体は黒髪以外はあまり歌われてこなかったのですね。明治になって初めて晶子が、「力ある乳ぶさを：」そういう歌をつくったと思うんですが、

やは肌のあつき血潮にふれも見で

さびしからずや道を説く君

という有名な歌をつくった。それまでは乳房の歌なんかとんでもなかったわけなんです——。

私はそういうことを何回か書いてきましたけれども、この間、西行の歌を読んでいて、びっくりしました。ただこれは男性が歌っている歌でありまして、やはり女性がつくっていないと思いません。ともかく乳房なんていう言葉自体が、もうタブーというぐらい使われていなかった時代が長く続いた。千年以上続いたわけなんです。そういうことを踏まえながら読みますと、西行が乳房なんていう言葉を使っているのが、「へえー、これはやっぱり破格だなあ」と思うわけなんです。それはやっぱり意味から西行というのは、私、ほんと深く読んだこともないわけなのですけれども、た

いへん面白い人じゃないか。けったいな、面白い、化けものみたいなどころもあったんじゃないかと思うのです。化けものという言い方はちょっと品が悪いのですが、ともかくいろんな面を突出させながら持っていた歌人であつたんじゃないかな、と思うんです。

ちょっと話が変わりますけれども、大学の時には国文科なんか行っていましたけど、なまくらで勉強はなんにもいたしません。短歌ばかりつけて、授業中に短歌つくって、ぐるぐる回すわけです。「私の歌、なんか思ったら感想書いて……」とか言って、そういうことをやっておりました。

ともかくそういうわけで、角川賞というのに応募しようと思いましたが、その時に折から試験がありまして、勉強しないで歌ばかりつくっておりまして、落としました、『万葉集』第一講読。ところが、あまりにも勉強しなかったから、三十歳ぐらいになって、どうにも『万葉集』やりたくって、京都大学で佐竹昭広先生という方が、『万葉集』を講じていらっしやいまして、私

もう三十歳を過ぎていたのですが、どうしても一度勉強のようなものがしたくて、もぐり込んだんです。大学生と一緒に、澄ました顔して通いました。そのとき佐竹先生が、字余りの法則というお話をなさいました。三重県の伊勢松坂の本居宣長という国文学者が、字余りの法則ということを見つけたんだよ、ということを佐竹先生がおっしゃって、「ああ、そうですか」と思って聞いていたわけです。どういふことを佐竹先生がおっしゃったかといふと、和歌というのは、五七五・七七で三十一音、きちっと定型が決まっているわけなんです。時々五音が六音になったり、七音が八音になったりいたします。破調といいますね、字余りですが——。字余りというのは、昔からたくさんあったけれども、そのことについては、まあ調子がいいからとか、仕様がなからとか、いろんな理屈をつけて、字余りのことは言われてきたんだけど、本居宣長の偉いのは、字余りの法則を見つけたことであらまして、それはもう歌人って数え切れないぐら

いいるわけなんです。字余りについて法則を見つけたというのは、本居宣長だけだったのです。

字余りの法則というのは、言えたいへん簡単なことです。字余りの中には、「あいうえお」の五母音の中の「え」を抜く、「あいうお」の四音が、必ずどれか一音入っているんだよということ。「あいうえお」の中の「え」を抜く、「あいうお」の四つの母音が必ず入っている。宣長は、『万葉集』から始まりまして、『古今和歌集』『新古今和歌集』『金槐和歌集』『玉葉和歌集』、もう、ともかくすべて調べ上げて、これに大体当たるんだということ、九十何パーセント以上の確率で当たるということを言っている。ところが、大体『万葉集』からずうっと字余りの法則にのっとってやってきているんだけど、『古今集』以降、特にひどいのは、「西行など殊にこれを犯せる歌多し」というふうに本居宣長は書いています。『古今集』あたりから、その法則が乱れ始めて、西行あたりはたいへんひどい字余りをしている。そしてその、字余りの法則にのっとらない字余りもしているこ

とを、本居宣長は言っている。

そういうことをも思い出しながら、西行をもう一度読み返してみまして思うのは、西行という歌人は、申し上げましたように、どうも古典の歌人らしからぬ、たいへん思い切った表現をしたり、とんでもない場面をつくったりしているところがある。ひと言で言えば、素人のような感じがする。素人歌人のような面白さがあるのではないか。

いま言った字余りなんか、構わずにやっちゃったと、そういうことをやはり思うわけですね。素人歌人の西行の面白さがあったんじゃないか。字余りは好き勝手にする。あるいはとんでもない表現で思い切った歌をつくってみたりする。そういう勢いというのかな、あまり構わないところがあったわけですね。

西行は、亡くなってもう八百年かなんか経つらしいんですけども、いまだに西行、西行と言われて、読み継がれているのは、決してその時代の歌い方とか、一般的な文脈とか、美意識とか、考えただけにとらわれることなく、生の感情というも

のを短歌の枠の中で表現した、その勢いというのかな、リアリティーというのか、とらわれのなさというものが、今日に及んで、多くの読者を持っているんじゃないかというふうに、私は読んでいくわけですね。

歌というのは定型なものですから、どうしても型にはまってしまう。その型にはまらないで、型を破ろうという迫力をいつも持っていてくれないと、結局は面白くない。そして自分も面白くないわけですね。昨日つくった歌ではない、今日の歌をつくらうと。そうする時にはどうしても定型の枠と格闘しながら、エイッとというような迫力が要るわけですね。そこが大事なんだろうということ、西行を読みながら改めて思うわけですね。

文語と口語ということで、馬場あき子さんと俵万智さんの歌を二首挙げてみました。今、口語が入っている短歌がよく出てまいります。そしてそれについていろんな議論があるのですけれども、私なども旧仮名遣いで長い間歌をつくってきたんで

すが、これだけ口語的な表現で歌をつくっている、口語の歌は新仮名遣いでつくったほうが、自分でもピタッとくるなあという気がいたします。ね。だから文語と口語と問題もありますし、新仮名と旧仮名の問題もありますけれども、口語の歌は新仮名でつくった方が面白い、まあピタッとくるなあということが、実感としてはあります。ところが、口語の歌を旧仮名遣いで書く面白さ（スマッチングの面白さ）というのもありまして、まあどちらがどうとも言えませんが――。

馬場あき子さんの桜の歌ですが、私はこの桜の歌がたいへん好きなのです。

夜半さめてみれば夜半さえしらじらと

桜散りおりとどまらざらむ

これは京都にいらした時につくられた歌らしくて、『雪鬼華麗』という歌集におさめてあります。馬場あき子さんが四十代の半ばごろにつくられた。「夜中に目が覚めてみると、夜中でさえも白々と桜が散っている。ああ、桜というのはもうとどまることなく、いつまでも、いつまでも散り続けて

いるのであろうか」というような歌の意味だと思うんですけども。言ってしまうばただそれだけのことなのですが、こういうふうに歌の定型の中で、文語で読んでみますと、たいへん豊かな不思議な時間と空間が出てまいります。

馬場あき子さんは、桜の花が散るのを、その日の朝も昼も見ていらしたんでしょう。「ああ、桜がチラチラ、チラチラ散っているよ、京都の桜だなあ」と思って、目にも見えて、心の内側にも、そういう桜の花が散り積もっていたんであります。そういうような状態で何日かを暮らしておられたわけですね。そして夜中にふっと目が覚めて見る、そうすると「ああ、夜もやっぱり桜は白々と散っている、そしてこの桜はとどまることなく、今もそうであったし、昼間も、朝もそうであったように、これからもとどまることなく散り続けていくのであろう」というふうに思っているらしい。

この歌を読んで、私がいつも思うのは、これは現実の世界に散り続けている桜のことを読んでい

らっしゃるのですけれども、歌の世界がつくって  
いく時間と空間というのがあって、それは決して  
現実の中にだけある時間と空間ではなくて、桜の  
花が散り続けている薄暗い不思議な空間があっ  
て、そういう終わることのない時間の中に、桜の  
花はずうっと散り続けていて、今も散っていて、  
これからも散っているような、そういう不思議な  
桜の散る時間、空間というものが、この歌の中か  
ら二重にあぶり出されるように読めてくるわけな  
んですね。そういうような歌の面白さというのを  
感じるわけです。

次は、俵万智さんの作、これはまったく口語で  
ありまして、

思いきり愛されたくて 駆けてゆく

六月、サンダル、あじさいの花

「思いきり愛されたくて 駆けてゆく六月、サン  
ダル、あじさいの花」って、なんか広告のコピー  
を読むようで、もう読んですぐわかる、パッとわ  
かる、意味もわかる、早く読めるわけですね。こ  
ういう口語の歌と文語の歌の違いはどこにあるの

でしょうか。

まず一つは、文語の歌は、曲線的であります。  
非常に曲線が豊かなのですね。リズムが曲線的で  
すし、今申し上げたように、時間と空間というも  
のを、ほかの場面に移して考えることもできるわ  
けです。曲線が非常に豊かであって、深みがある。  
その曲線はなんでもできるかといいますが、歌って  
不思議なもので、五七五・七七といふうちに三十一  
文字になっておりますが、初句と二句目の間の、  
五と七の間に不思議な空間がある。そしてまた空  
間がある。スラスラスラーッと読んでしまうから、  
それで終わりのような気がいたしますが、ほんと  
は大きな空間があいているのですね。そしてその  
空間に助詞とか助動詞を置く。助詞、助動詞が、  
空間の中に曲線をつくるんですね。そしてその曲  
線が、たいへん深みをつくってくれる。深みの中  
に入りながら、リズムで読んでいきながら、いろ  
んなことを思う。歌一首を読んだ後も、何か余韻  
が残ります。それが歌の面白さでありまして、た  
いへん曲線的であります。そしてそういう曲線が

深みをもたらずと同時に、さまざまな読みをも誘  
ってくるわけです。歌一首は決して一つの答えが  
あるのではなくて、十人の人が読めば、十通りの  
読み方がある。いろんな読み方ができるわけで、  
正解はないわけです。

ところがそれと非常に対照的なのが口語の歌で  
ありまして、「思いきり愛されたくて 駆けてゆく  
六月、サンダル、あじさいの花」というのを読ん  
で、パッと映像が目に浮かんでくる。だけれども  
それから先はあんまりない。平板な感じがいたし  
ます。この平板さというのは、いま申し上げまし  
たように、六月、サンダル、というふうに、助詞、  
助動詞がなくて、あっさりつくってあるから、深  
みがつくれないわけです。そして口語の歌は、そ  
こをまた狙ってつくっているわけですね。

たいへん極端な言い方なのですが、短歌という  
のはいい歌をつくるために、みんながしこしこ学  
ぶんだけれども、駄作をたくさんつくらないとダ  
メだよ、というところも五十二歳になってやっと  
最近わかりかけてきました(笑)。

こういうことを最近思いますのは、やっぱり私、  
近代短歌百年で考えてみると、斎藤茂吉が一番す  
ばらしい歌人だと思っております。茂吉はやっぱり  
もうたいへんな歌人です。『赤光』と『白き山』  
に二つの峰があるというふうに言われております  
が、確かにすばらしいのですが、私は最終歌集の  
『つきかげ』の惚け短歌が面白いのです。

これは『つきかげ』にある歌なのですけれども、  
ぶらぶらになることありてわが孫の

斎藤茂 一路上をあくる

「ぶらぶらになることありてわが孫の斎藤茂一  
路上をあくる」って、まずもってオノマトペ(擬  
音語、擬態語)の「ぶらぶら」って、一体どんなんで  
すか。「ぶらぶら」とか「ふらふら」とかならわ  
かりますね。「ぶらぶら」ってどんなのかわから  
ない。自分の孫が道を歩いている、茂吉が見てる  
わけですね。おれの孫の茂一がやってくるよと思  
って見るわけです。この歌の面白いのは、それ  
は「ぶらぶら」も面白いに違いないけど、「ぶら  
ぶらになることありて」が面白いんです。つまり

斎藤茂一はしょっちゅう「ぶらぶら」であるわけじゃありません。初めから終わりまで「ぶらぶら」ではなくて、「ぶらぶらになることありて」が面白い。「あいつぶらぶらになりよった」と、こう見てるわけですね。その人間観察が面白いのです。ずうっと「ぶらぶら」なら面白くないけど、時々「ぶらぶら」になる(笑)、それを面白いと思ってる。もう七十か六十代終わりぐらいかな、その惚けかけた茂吉が、見ながらこれを作っている。そして「わが孫の斎藤茂一」って、ちゃんとフルネーム。「路上をあるく」なんです、「あるきくる」じゃなくて「あるく」。現在形で言っている。普通なら「あるきけり」とか「あるきくる」とかつくるはずなんです、「あるく」って、あっさり愛想も何もなく終わっちゃっている。そういう『つきかげ』ではあっさりとした散文的なつくり方しているんですね。その面白さ。

それはともかく、斎藤茂吉は生涯に一万七千首の作品を発表して残している。与謝野晶子が五万首と言われておりまして、窪田空穂はもっと作っ

たかな。明治天皇は知られておりませんが、岡野弘彦さんに言わせると、五万首とか、十万首とか作られたとかおっしゃって、「あッ、そう」と聞きましたが――。もっとすごいのが、大本教の出口王仁三郎（にきぶろ）という人は、十万首作ったと言われております。本当かどうか私は知りませんよ、調べたわけじゃないから。いずれ、そういうぐらい沢山つくっている。

斎藤茂吉が一万七千首つくった、出口王仁三郎が十万首つくったと言われている。そういう作品、九割以上は駄作ではないかと思うんです。駄作があるから、いいのが光るのです。

西行が四十年ほど経って、また奥州平泉にこうやって来ます。そのときの道すがら、小夜の中山に差しかかりまして、「命なりけり小夜の中山」と歌い上げた。この言葉のリズム、律のよろしさというのは、深く入ってくるのです。名歌はいいに違いないけれども、死ぬまで歌をつくる時には、駄作をたくさんつくらないと、いい歌もできない。そして駄作をつくるということは、駄作というの

は言い方がちょっと悪いんですが、私が言いたいのは、作り続けなきゃダメだよということなんですよ、それがとても大事で、作り続けることによって、前進力がついてくるんですね。作り続けることによって前進力をつけていくというのは、やっぱり実感として感じますね。

たくさんお話したいことがあって、用意してききましたけれども、残念ですが時間がなくなってしまうんですが、四月からNHK歌壇で、私は第三週の日曜日の七時半からやりますので、テレビでお目にかかれる機会が、これから二年ばかり続きそうです。

ありがとうございます。(拍手)

(中尊寺西行祭第二十回短歌大会講演記録・平成11・4・29)

## 歌は主観の表現である

— 内界と下界 —

加藤 克 巳

きのう四月二十八日、一ノ関『個性』会員から一ノ関は雪ですよ、と電話があつて、急に冬の装束で埼玉を発つて昨日当地にまいりました。さすがに、きょうも先程までの本堂での法要の間、随分とおどろきました。最前列の赤絨緞じゅうたんの上に正座しておりまして、貫首さまの読経、そして法話が終つた時、立ちあがろうとしましたら足がしびれていて閉口しました笑。今日はこれから与えられた時間いっぱい、皆さんと一緒に、西行に因みながら歌の話を致したいと思います。

私ごとを先にちよつと話しますが、実は私、昨年の暮に倒れまして、それが一過性脳梗塞と

診断され、まだ完全によくなくなっておりません。しかしなんとか精いっぱい話してみたく、お聞きぐるしいことになるかもしれません、ご清聴のほどお願いいたします。

さて、今も外は強い風が吹いているのでしょうか。さき程貫首さまの読経の間、坐っている後の方から山の音が、山に吹く風の音が聞こえて来ました。今も聞こえているような気がします。風が吹くと関山の樹々があのように泣くのか、喜ぶのか。坐っている私の背筋を貫くような山の風と山の音、私は凄いなあといやが上にも緊張いたしました。

皆さんご承知のように、今年平成元年は西行没後八〇〇年で、西行は一一九〇年に亡くなられました。僧籍にある方が亡くなられた時は「円寂」というのだそうですが、齢は七十三歳で、河内の弘川寺の草庵において、皆さんのご承知の願ねがひはくは花の下もとにて春死なむ

その如月きさらぎの望月もちつきの頃  
と歌って、その翌年の二月十六日に円寂しました。

それゆえに今年四月九日、弘川寺において八百年遠忌おんぎが執り行われました。

芭蕉は今年、奥の細道の旅に出掛けて三百年というところで、各地でいろいろの記念行事が行なわれているようで、平泉でもなにか賑やかな催しがあるように見受けられました。芭蕉は当時四十八歳、東北への長い旅も曾良そらを従えたり、途中歓待を受けながらの完遂かんずいだったのです。

ところで西行はどうかというと、前後二回にわたって平泉を訪れている。一回目は諸説があつたしかとはわかりませんが、二十六歳から三十歳の間だったろうと思われま文治二年す。第二回目は六十九歳の折で、東大寺砂金勸進のための東北行だったのですが、能因のきん法師の歌枕を、そして平泉の藤原秀衡を慕つての旅だったのです。この長い旅を六十九歳で敢行した。六十九歳というのはそうとうな齢です。そのそうとうな齢を西行は一人で歩いたのですからたいへんなことです。頑健がんけんそのものだったのですね。西行はなぜそんなに丈夫だったかという、皆さんご承知のことと思いますが、西

行は佐藤左兵衛尉さとうさへいゑう義清よしみよと言つて、鳥羽院とりはにんの下北面げめんとして勤務していた。下北面というのは、院の御所の北面にあつて、警護する六位の者のことで、容姿武術学芸に秀でたものが選ばれた、ということとで、西行はいい顔をしていた、歌もすぐれていた。そして頑健がんけんそのものだったにちがひありません。弓馬についても一流中の一流だったのです。その西行が二十三歳で仏門に入るのでありますが、そのことは後で話すことにして、さきになぜ長い、ながい陸奥りくおに二度も行つたのかについて話します。西行というのはこの藤原家と親戚なんですね。遠い先祖が一緒だった。俵藤太秀郷、そこからわかれてくるのです。千晴ちひろという系統と千常ちねという二流れがあつた。千晴の流れが藤原清衡・基衡・秀衡、そして泰衡、千常の系統が佐藤康清、この康清の次男が義清よしみよなのです。したがって西行が東北にあこがれたゆえんがそこにあつた。特に平泉にどうしても行きたかつたのです。遠い祖先の血が一緒だった。そういうことで二度も平泉へ行っているのです。頑健な身体を持ち、又豪毅ごうぎな精神

を持ち、そこらへんが凡人ではなかったのですね。

六十九歳でここに到着した時、東稲山を遠望した。『東鑑』によると、三十里にわたって桜が咲きみちていたと言うんですね。西行は、吉野山の桜が天下第一品でほかにはこんなに桜が沢山咲きみちているところはないと思っていたのですから、驚きました。

聞きもせず東稲山の桜花

吉野のほかにかかるべしとは

奥になほ人見ぬ花の散らぬあれや

尋ねをならむ山ほととぎす

『山家集』

と歌った。もっと奥にもあるんじゃないか、と二首目はそんなことなんです、これは西行の持っていた生まれながらの憧憬、つまりあこがれ心なんです。ですから、西行は全国にわたり随分とあっち、こっち歩きまわったんですね。

衣川を見に行ったときの歌もまた有名な歌という事になっていきます。

取り分きて心もしみて冴えぞわたる

衣河見に来たる今日しも

この歌の詞書に、「雪降り、嵐はげしく」と荒天の日であったことを述べています。河岸に着いてみて、衣川の城は城壁をめぐらした立派な建物というか、構築で、西行はびっくりした。「心もしみて冴えぞわたる」というのは詞書では、「汀凍りて、とりわきさえければ」とあります。西行の感動は、長途の旅を到着してすぐ衣川を見たくなつての、その結果のこの歌、よくわかります。ま、それはそれとしてついできると言っては変ですが、そして前後することになります。皆さんのご承知の歌を二つ三つあげます。

六十九歳の齢で伊勢から東北へ向かって歩いて来たときにあの小夜の中山で歌った一首

としたけてまたこゆべしと思ひきや

命なりけりさやのなかやま

小夜の中山は第一回目の旅の時通った。それから何十年かたつて再びその山を越えるとは思わなかったが、有難い命をさずかって又越えることができた。その感動の歌なんで、その中山からちよ

っと行くと、こんどは富士山が見えたんですね。

これが名歌の

風になびく富士の煙の空に消えて

行方も知らぬわが思ひかな

『新古今和歌集』巻十七

を生みます。最晩年の頃にあたるんですが、これは西行自身も自讃してゐるんです。自分の代表歌だと――。

眼前に富士山が見えてその富士山のところに風が流れ、従って富士の煙は空へ消えて行った。それを見て西行は自分の心もそんなところに来ているんじゃないか。永いこと生きて来たけれど、これからどうなるんだろう。「行方も知らぬわが思ひかな」――情景は作者の内部と全く一致したんです。従ってこれは叙景と抒情とが合致した形において名歌になった。

さて、皆さんいつも疑問をもっておられることについて話します。西行という人は、あんな立派な武士だったのだから、武士を押し通していたら、きつとえらい人になっていたろうに、何で出家し

たのだらうかということですね。

北面の武士の折に、平清盛と同年なんです。そんなことで、西行が何故出家したのかいろんな説が言われております。それらを要約してこうだと確定的なことは言えないんですが。

そこですべて言ってみるならば、鳥羽院の下僕であったとき言いました、第一の遠因といえますか、理由はですね、院政ということご承知です。白河法皇が院政を布いたんです。それから堀川天皇において鳥羽天皇が法皇になった。

そうやって院政の時代が続いた。これは我が国の歴史の中でも特殊の時代であつて、いい面ばかりじゃなかったんですね。とにかく内部的にはいろいろなことがあつた。口に出しにくいような時代代だつた。それを北面の武士の西行は、そういう頭の良い人ですから直感的に、こういう時代はこれはいかんと、いう思いがあつたかと思ひます。したがってそういう院政時代における皇室内、あるいは関白との間とかがだんだんにくなくなつてやってくる、そこから離脱したい。そんな気が持



まず湧いてきたのでしょうか。

このことについて、もっと具体的に言いますと、いやなことだと言ったのは、藤原頼長よりながという人がいる。この人は男色、あんまり話したくないというとうそになるけど、院の中に男色があって、それで西行自身も、はじめて言いましたように好い男。だから院内でもそうとうもてた。同時に、徳大寺家から行って後に待賢門院たいてけんという鳥羽天皇の中宮になった女性からも愛された。それから後白河法皇、鳥羽法皇その他からも愛された。しかしそういう中はずっと居る気持はだんだん薄れてゆく。文化不毛の地から離脱して自分の心の世界を得たという気持が湧いて来て、もっと具体的に言うると待賢門院——口に出すのものはばかられる高貴な人だということになっていきますが、『源平盛衰記』に書かれているところによると、西行がこの人に恋をした。ところが、身分が違うわけで、それであまり度重なると世間から非難を受けるといふことで西行はそれから離脱せざるを得なくなったという理由が一つあります。

もう一つ大事なことは、西行は早くから仏心を持っていた。だから仏門に入りたくてしようがなかった。自分の知人が草庵をむすんでいる、そのたたずまいなどを見ると、大変魅力を感じて、自分もああいう、生活をしたい。俗世間から離れて月と花、自然を相手に生きてゆきたい。これは、自分の内なる世界を大事にしたい。外界に対して内なる世界をと考えた。さらに言えば、もう一つの理由は、同じ北面の武士に友達の佐藤範康のりやすがいて仲が良かった。ある日御殿の中で西行は十首歌を作った。そしてすごくおほめを得た。待賢門院から御褒美を頂いた。その日の帰りに範康と、明日はなるべく着飾って良い格好して御殿を訪れようじゃないかと二人で約束したんです。それで翌日佐藤義清は身を飾って友達の家へ行った。人が集ってワァワァ言っている。何だと思ったら、その友達が一晚でこの世を去っていた。死んでいた。義清、これ、そうとうショックだった。世の無常というのが、はっと来たんですね。これら、今迄言った遠因、近因、いくつかが重なって仏門に入

ることになったのですね。

それが二十三歳で、『西行法師絵巻』というものがあって、有名な場面の絵があります。西行が仏門へ入るといふ決心をして自分の家に帰るわけです。そして、可愛い四歳の女の子が廊下に居て、お父さん帰って来たと言います。うととしたのを廊下から足でけつとばした。それは「世の絆きずなにひかれては出家できない」と、こう思ったんですね。だから、覚悟をつらぬくためにはわが可愛い女の子もけつとばす位の気持ちだったわけですね。そうやって彼は仏門に入りました。ところが仏門に入ったけど西行は自分の心だけ大事にすればいいんだという、いわゆる隠者的な生活をしたかっという、そうじゃないんです。どこの草庵を結んでいたときも、世の中の動きに極めて敏感で、従って俗界と離れることができなかった。しかし自分の心の世界は大事にしなきゃならぬ、というこういうことであるいろいろな歌が生まれるわけです。

さて、『短歌現代』の七月号に書いた「歌は主

観の表現である」という文、どういふことかといえますと、私たち誰もが内界と外界があるわけです。心の世界と、自分をとりまく周辺、外界の表現というものがあつたんですね。

しかしそう言ってみると、このことは世の中でいう客観と主観、という風に要約することもできます。同時にその外界を表現することは写実ということにも関わります。これは皆さん一番得意なところでしょうが、その写実と内界の関わりという問題が歌にとって非常に大切なんです。いいですね。

それで、歌は昔から抒情詩と言われてきました。従って歌は叙景歌を歌っても抒情歌になる。これから言うことは僕の先生の萩道空はぎみちくうが言った、「いかなる客観も主観を脱却できないように、主観もまた客観の要素を拒外しては成り立たない」このことを、早くも大正の時代に言っているんですね。僕が偉そうにあちこちで話しているのですが、はるかに昔、道空はちゃんと、こういう風に言っているんです。すこし難しかったかも知れませんが、

いかなる主観も客観の裏づけがなければなりたない。いかなる客観も、主観が必ずその中に入っている。これ、皆さんの作歌にあって非常に大事な事なのです。そうなる、「外界を見るごとく内界を見る」ということも言われる。そしてそこから真の抒情詩が生まれるのだ、ということをも言っている。これ、釈道空が言ったことなのですが、それじゃあ写生道の大先輩の正岡子規なんか、どういう考えを持ってたんだろうかと、今疑問を持たれたひとがあるかも知れません。皆さんは写実を一所懸命に勉強しています。アララギ系は皆写生というところから入りますね。じゃ、道空の言った話と、子規の写生と、どうだろうか、或いはお思になるかも知れませんが、実は、子規が次のようなことを言っているんです。

「空想に偏すれば陳腐に陥る。自然というものは得難く、こんどは写実に偏すれば平凡になってしまふ。そこで、空想と写実とが合同して、一種非空非実の大文学はないものかなあ」と言ったんです。これは道空の言った理論と同じことなんです。

そこで、正岡子規の作品をあげて説明してみますと、これも皆様がよく御存知の歌なんですが、

瓶に挿す藤の花房短ければ

畳の上にとどかざりけり

この歌、いままで何回かお聞きになったと思います。表面だけ見れば、「あたり前じゃないか、それだけのことか」となりますね。実はこの歌の背景は大変な内容を持っているのです。十首の連作の内の一首なんです。

正岡子規はご承知のようにひどい病気をした。発熱乱調子で昼夜おし通しに苦しめられ、三日も四日も睡眠ができないほどの苦しみに耐えている。腰のあたりは痔瘻で膿が出て、毎日包帯をとりかえる。「大声あげて泣き申候」とある。そういう子規がこの歌を作った。そうすると、この歌を作った背景はどうかというと、寝たきりの子規、そして枕頭に瓶がある。藤の花が挿入してある。そういうことであれば、作者の視点は横になっている。横になって視るから、藤の花房が畳の上に届かない、ということが、普通の人が見ているの

とは違って、はっきりと受けとれる。切実な思いで視るのです。自分が立てない、起きあがれないから、寝たまま毎日そればかり視ている。それを率直に歌うと、それは作者の深い思いの籠った写実の歌だということになるのではないか。

生きたいという気持がある。起きたいという気持がある。早く直りたいという気持はあるけれども治らない。生涯治らない、死んでしまうんじゃないか、などと思いつながら寝ている、正岡子規がこの歌を作った時の気持というの、よくわかりますね。ま、十首あげたいが時間の都合で省略します。その後、亡くなる前に作った歌を二つ三つ掲げますと、

いちばつの花咲きいでてわが目には

今年ばかりの春ゆかんとす

平明な歌ですね。これは写実と心象とが合体し、正岡子規の言ったこと、そして道空が言ったことと同じです。いちばつの花が咲きいでた。それは自分で目で見たのだから客観ですね。しかし、すぐに今年ばかりの春ゆかんとす、と歌った。する

とこれは、自分の思いでしょ。もう今年で命が無くなるんだと。いちばつの花がこんなに綺麗に咲いているけど、それは、わが目には今年ばかりの春を讃えている花なんだ。これは哀切きわまりない歌になってきている。しかし歌っているのは写実が中心。もう一つ、

夕顔の棚つくらむと思へども

秋待ちかねてわが命かも

これも哀切きわまりない歌ですね。そして終に若くして死にました。従って、写生の神様と言われた正岡子規は、写実だけをやってたんじゃなくて、写生を通じて心を述べています。

そこで、内界と外界の問題が起きてくる。外界を通じて自分の内界を歌い出しているんですね。ひとつ皆さんこのことを是非おわかり願いたい。

これは正岡子規が始めたのかというと、そうじゃない。遠い万葉の頃からそういう歌が沢山ある。たとえば、『万葉集』の中で客観を重視し、写実をたいへん大事にした作品を二つあげてみます。天智天皇のお子さんと、歌の非常にうまかった

志貴皇子という方の歌

葦辺ゆく鴨の羽交ひに霜零りて

寒き夕べはやまとし思ほゆ

これ、明快な歌ですね。葦辺をゆく鴨の、羽と羽の交わしてるところへ霜が降ってる。そこを写真してるのですね。写真が非常に的確ですからね。われわれ読んだらすぐその状態が目の前に浮かびますね。そしてぶるぶると震えるような寒い夕暮れがそこから感じることが出来ます。そしてそのあとは「やまとし思ほゆ」と自分の主観を述べている。そうすると、外界を借りて、やまとが恋しいという自分の内界の世界を表現したということ、ばかにうまい話のようにきこえるかもしれませんがせんけど、本当にそうなんです。

もう一つこの人の歌で

いはばしるたるみの上のさわらびの

もえいづる春となりけるかも

という歌がある。この歌は、小さな滝があつて、滝の上から水が流れて来て落下する瞬間、たぎつ滝になってゆく、そのほとりにさわらびが萌えは

じめている、それだけを言っているのです。これは、大変明快だし、しかもはっきりとした写生の歌ですね。写生に徹しています。主観を述べてい

ません。しかし皆さん、この歌から何を感じますか。いうまでもなく、春の到来を喜ぶ作者の気持が、われわれにはそくそくと感じられます。だから実は写生をしておきながら、言っていることは作者の心の喜びを歌ってるんです。わかりますね。それに少し深くたちいってみると、志貴皇子が天皇から何か佳い事を戴いた、土地をもらったとか昇進したとか、そういう喜び事が背景にあつて歌った。それはしかし、ちょっとこの歌からはわかりませんが。だけどこの歌ははっきりしてますね。喜びのうたなんです。

高市連たけちのむらじもの黒人くろひとという人がいてこれは人麿ひとざらと同じ年代の人であります。紹介してみます。

いづくにか舟はてすらむあれのさき

こぎたみゆきし棚なし小ぶね

この歌全く写生そのものです。ここでは作者は主観を述べていません。主観語が無いんです。

だけどこの歌から誰でも感ずることは何かというと、これは旅愁です。旅に出て、夕暮れになって海上を見ていたら、小さな棚のない舟がずうっとゆるやかに湾曲するようにこいでゆく。あの舟はどここの港に着くのだろうか、作者の心は旅愁を感じてる。これ又、客観が主観を述べているのだといえます。写真しながら実は自分の心を表現しています。もう一つ僕がいつも得意がって歌の例としてあげるの、同じく『万葉集』巻一の八十二番、長田王という人の歌

うらさぶるころさまねしひさかたの

あめのしぐれのながらふみれば

これは淋しい心が胸いっぱいになった。それは空から時雨が斜めに降っているからだ、それだけのことを歌ってる。この歌、僕が今まで話して来たことを具体的に説明してくれたような歌で、よくわかりでしょう。最初に少し解釈してみますが、「うらさぶる心さまねし」これは淋しい心が胸にいっぱいになったという意。それは久方の空から雨がななめに降っているからだって、こん

なわかりいい単純な歌、他にないですね。この歌も詮じつめれば、外界によって自分の内界が触発されたという歌です。外界を見ていたら内界がじつとしていられないさみしさがいっぱいになった、って歌ってるんですよ。そこで背景を憶測すれば、長田王が都に妻をおいて旅に出た。妻の事が常に胸にあつて時雨が斜めにさあつと降っただけだけれども心がさびしくなった、とこういう事にもなるわけです。

それでは皆さんの愛読している斎藤茂吉の歌を二、三あげてみます。『あらたま』というこれは第二歌集です。『赤光』の次の。

あかあかといっぱんの道とほりたり

たまきはるわがいのちなりけり

これも非常に簡潔な歌い方をしている。「あかあかと」一本の道がすうっと通っている。これは写真です。写生です。「いっぼんの道とほりたり」と「たまきはるわがいのちなりけり」。これも、さっきの長田王と同じように写実を主観に結びつけて主観歌としてしまった。どうですこの歌、わ

かり易いですね。実は伊藤左千夫が死んだ時の歌なのです。びっくりしてかっけてゆく、という歌なんです。もっと単純な歌をあげます。これは、秩父の山で歌ったんですね。

ゆふされば大根の葉に降る時雨

いたくさびしく降りにけるかも

これは茂吉が大根の葉に時雨が降っているという単純な状況を見て、見てるうちに自分の心の中にさびしさが湧いてきた。つまり外界と内界とが行き来するわけですね。外界が内界を呼び覚ます。或いは呼び込むわけです。そこで歌ができあがる。最初に、歌は抒情詩である、と言ったのはそんなんです。だからいかなる客観を主張してみても、それは背景には主観が籠っている。それから主観を述べるのには写生がないと具体性がなくって、リアリティーがない。頭だけで作った観念歌になる。だから外界と内界と結び合って写生、客観と主観、心情とがいみじくも合体してとけ合ったときに歌が明快になる。結局、歌は主観の表現なのであります。

それで、その茂吉は「短歌写生の説」というのを若いうちに書いている。茂吉は多くの人に写生一点張りの人だと思いついたんですね。皆さんを。ところが、晩年に至るにしたがって、だんだんと写生だけじゃなくなって心情主義的な歌、象徴的な歌を作ってしまった。これは面白いことですね。だから、人間というか歌人はね、誰かが一人、こうだと言ったらそれに常にとられ、思い込んでしまい、柔軟な思考を失ってしまう。それでは駄目で、その人の生涯を思わなきゃ。茂吉なんか写生を言い出したが最後は象徴に達したのです。その例は、死ぬちょっと前の歌ですが、

いつしかも日が沈みゆきうつせみの

われもおのづからきはまるらしも

いつしか日が沈むというのは外界。それを見ていると自分の命がきまる。これは完全に外界と内界を結びつけた歌ですね。

そこで、話をまたもとへ戻して西行の歌です。

風になびく富士の煙の空に消えて

ゆくへも知らぬわが思ひかな

この歌も今あげて来たような幾つかの歌と同じ発想ですね。外界を見てると自分の内界がそこから触発されて表現される。「風になびく富士の煙の空に消えて」、これ、写生ですね。「行方もしらぬわが思ひかな」。——あの状態と同じように自分の心の中は、これから先どうなるのかわからない、と言って内界と外界とを結びつけている。これ、非常にわかり易いですね。

牧水が房総半島で歌った歌

白鳥はかなしからずや海の青

空のあをにもそまらずただよぶ

これは、「かなしからずや」と主観語が中に入っていますね。だからまことに分り易い歌だ。見ているのは海上に浮き沈むしらとり。それを写生したのだ。しかし写生してるうちに作者の心は風景に触発されて「かなしからずや」というのは鳥のかなしみではなくて自分なんだ。そこが面白いですね。

調べてみますと、牧水が早稲田大学英文文学科の学生だったんで、若い時に或る女の人と恋愛にお

ちいつて房総へ逃避行をきめて、三日も四日も白浜の近くの宿に居た。そして、海岸に行ったときに見た白鳥の歌なんで、この「かなしからずや」は牧水にとっては大変な思いがここに込められていたのですね。

西行法師のこういふ歌、どうですか。

なげけとて月やはものを思はする

かこちがほなるわがなみだかな

月は物を思わせるものであろうか、いや、思わせはしない。それにもかかわらず月を見ていると自分にはかなしい思いになってしまう。

これは、かなり高度な歌ですね。僕は思うに、これは月と自分の心とが純粹なカタチで行き来している。外界と内界が行き来してる、行ったり来たりして。そう思うことの例として明確ですね。

先ほど、貫首さまが言われましたね。西行さんは桜の花が大好きって。だから桜の花を歌った歌は沢山あります。さきほど法要の場で佐藤撰子さんが献花と言って桜の花を献上しましたね。あれ、いいなと思った。西行さん、喜んだらうなと、僕

は思った。非常に桜の歌が多いですね。

死ぬ前の年にもご承知のように歌ってますね。ところが、月の歌も多いんですよ。

ゆくへなく月に心のすみすみて

はてはいかにかならむとすらん

つまり、月をじっと見ていると、すうっと心が澄んでくる。ひきつづきずっと見ていると、果は一体どうなるんだらうか。自分は俗界を捨てて僧門に入った。にもかかわらず常に俗界に心引かれている。一体自分は何なんだらうか。これから先どうなるんだらうか。そんな歌ですね。

歌というものは、結局とどのつまりは主観の表現である。いいですね。心を表現するものである。従って風景を描いても外界の何かを描いてもそれは作者の心を通じて風景をつかんで描いている。皆さん注意して欲しいのは、写生、写生ということにとらわれて、物を写すことだけやってると心がその中に表現できてない。どっからどう見てもただごとの歌になってしまふ、報告歌になって

しまうことがありますから、そこを注意しなきゃならない。要するに写実をしたり、風景を描いたり外界のいろんなことやるときは、そこにことばとして主観語は使わなくても、読む人がその人の心が籠ってると思ってくれるような歌を作らなくてはいけない。それにはどうしたらいいか。それは、皆さん内界と外界とどっちが大事かっていうと、内界の方が大事ですよっていいですね。僕もそう思う。けれども、外界を抜きにして内界だけ描こうとすると観念歌になっちゃうんですよ。だから現実というものは、自分達の身辺にある人事的なこと、孫の歌、子供の歌でも何でもいい、風景など——外界を歌うことによって自分の内なる世界をそこで表現する、これを歌という。

皆さんの歌、今言った歌に匹敵するんですよ。いい歌がある。それは知らず知らずのうちに僕が言っていることがちゃんと達せられてると思う。外界を大事にしなきゃ内界は表現できないんですよ。だから、いい歌を作るにはいい心を自分の心の中にやしなっていくこと、それが一番だいじですね。

同時に、外界をようく見ること。外界を馬鹿にしちゃいけません。物は、心そこに在らざれば見れども見えず、とよく言われる。このこと昔から言われてるから誰でも知ってると思いますが。

街を歩いていても、どこに居ても自分の心がそこに無かったら見ても見えない。向うから隣の奥さんが来た。挨拶する。答礼しないでツーンと行っちゃう人が居るんですね。どうしてかっていうと、その人自分が家を出るとき水道栓をきちっとしめてきたかしら、なんて思うと、もう気が気でないからむこうからおじぎしてるのが全然見ええない。心そこにあらざれば見れども見えず——。

だから我々は常に、心をもって外界を見る、そのように努める。そうすると今迄見えなかったものが見えてくる。自分の周辺の風景は子供の頃から年齢になるまで毎日接しているが、あまり同じ物見ていると実は見てないと同じことになる。本当はもう見えていないんですね。旅行など行くとなにかもが珍しく見えるのですが、自分の周辺のものはあまり気がつかない。

ところが、或る時歳をとって、たとえば一過性の脳梗塞にでもなる。そうするとね、心が沈静化して静かに物が見えるようになる。自分の周辺にすばらしい風景があったというのに気がつく。それは、見る心が生まれたんでね。何十年見ても心そこにあらざれば見れども見えなかったんです。大した風景じゃないとばかり思ってた。ところが心静かに落着いて見ると、自分のうちの庭の風景、いやあ、こんなに良い所だったのか。こんないい状況があったのか、と気がつく。このこと、うそだと思ったら試してごらん下さい。帰って自分の所の周辺を見て、一木一草のたたずまいを見て下さい。それは、何とも言えない味があるんですよ。庭に在る石ひとつ。こんな石はおじいさんの時に入れたのだから、もう関係ないと思ってるけど、その石を一寸気を落着けて静かに見ると、その石のたたずまいが実にすばらしい。雨の日の石、晴れた日の石、夕方の石、朝茜がさす時の石、ましてや雪をかぶった石なんてのはね、これは素晴らしい題材です。だけど自分の家にあっ

た石なんて今迄ちっとも歌わなかったって人お  
げい居るわけだから、今日はこれから午後歌会が  
あるけれど、明日でも明後日でもいいから、自分  
の周り、すこし心をいたして見てみて下さい。そ  
うしたら新たな発見ができると思う。

実は、僕の先生で釈道空、折口信夫って、あの  
先生は偉大な先生だった。五年間講義を聞き続け  
たけど、あの先生は教室へ出て来るとき、別にな  
んにも持って来ない。ただ、名刺みたいなちっちゃ  
いやい紙きれもって来て、それに何か、書いてある  
のね。ちょこちょこっと五行か六行位書いてあっ  
て、それを置いて二時間話をする。そうすると話  
しが飛んでね、枝葉がどんどん飛んでっちゃう。  
それをはじめて聞いたひとは、折口先生の話は、  
何言ってるんだか分らないっていうんです。ところ  
が僕らみたいに五年も続けて聞いてると、ようや  
くわかるんだ。ああ、今の話は、中世の猿楽から  
能楽へ移る過程をやってるんだなってことが分  
る。五年間も続けて聞くと、枝葉には全部脈絡が  
ちゃんとある。

折口信夫は官学の人からは異端の学だと言われ  
たんです。それで『折口信夫全集』はあとで芸術  
院賞恩賜賞をもらったんです。僕から言わせれば、  
文化勲章をあげればよかったんだ。でもまあ、先  
生は大歌人だから、そんなものもらっても、もら  
わなくてもかまわないでしょうね。話がそれて  
しまいました。

歌は主観の表現である、ということを経験にも  
う一度はつきり言わなければならぬ。

西行法師も万葉も牧水も茂吉も、もつとあげれ  
ばどれもこれも、歌は主観の表現であるというこ  
とを実証しています。そして、歌は内界と外界と  
の行き来の中から生まれるものである。だから客  
観に徹してもよろしい。その客観に徹したとき、  
その裏からそくそくと主観が、その人の思いがに  
じみ出るような歌が良い歌である。それから、今  
度は逆に主観、自分の心情を中心に歌うときでも、  
その思いだけを歌ってもうまくゆくときもありま  
すけれども、それに裏づけがあつて現実感がある

と、その思いってのはものすごく読者にリアリス  
ティックに伝わる。だから、主観を主体にした歌  
の場合でも客観は絶対におろそかにできない。

写生は絶対におろそかにできない。写生の力は、  
そう簡単には修得できないので、皆さんはいまま  
で長い間、写生に専念されてこられたことと思う。  
いいことだと思う。しかしそれだけではだめで、  
やはり何が歌われているか、何を歌おうとしてい  
るか、そこが問題なのです。それには、今言った  
ように現実をよく見る。自分の内部と外部とをよ  
く見る。そして歌にそれを歌いあげてゆくとい  
うことです。歌は主観の表現であると、くりかえし  
くりかえし、くどいほど話しましたが、少しは  
わかっていただけたでしょうか。皆さんはこれか  
ら自分の考えで、私が話したことをひとつの糸口  
として、実作において、これから自分はどうい  
う歌を作っていくかという考えをまとめて下さい。  
押し付けは致しません。自分で悟らなげやあだめ  
です。まあ僕のはなしは、こうやりなさい、ああ  
やりなさいと、教訓じみたことは言いません。た

だ、サゼッションを与える、手引きですね。それ  
をきっかけとして、生かすのは皆さんひとりひと  
りのことなんです。だから皆さんは、今日僕の話  
したことを、お帰り下さってじっくり思い直され  
て、これから先の長い作歌の生活に、いくらかで  
も役に立てて下されば嬉しいことだと思えます。

(中尊寺西行祭第十回短歌大会講演記録・平成1・4・29)

本稿は、著者のご許可をいただいて、『加藤克巳評論集  
成』(平成六年十月/沖積舎発行)より転載させていた  
だいた。著者ならびに出版社のご好意に甚深の感謝を  
申しあげます。

※なお、読者の参考のために、文中に「」で傍注  
を付した。記事は本誌編集者の書込みであり、歌詞  
の対校は、便宜、岩波日本古典文学大系本によった。

## 〈ハス二題〉 「中尊寺ハス」 余話

円乘院 佐々木邦世

金色堂の柩の中から蒐集されたハスの種子が昨年七月、八百年の眠りから覚めて開花した。

ハスの花は、未明に開きはじめる。朝七時か八時ごろ花弁は開ききって、昼過ぎにはまた閉じる。四日目、開いた花卉はそのまま地に落ちてしまう。

去年の夏は、「梅雨明け」宣言なしの異常気象であった。世の中の景気はいよいよ低迷して、なにか日本中が確とした抛りどころを失ったかのようにも思われた。

「中尊寺ハス」の開花は、そうした夏の、お茶の間に話題を提供した。和蓮の一種で、ひとときわ清楚に見えた。

昭和二十五年の御遺体調査で、三代秀衡公の柩からはモモヤオニグルミ・ウワミズザクラ・ウルシなど十種ほどの種子が蒐集されている。四代泰衡公の首桶には、ハスの種子が納められてあった。

無論、泰衡のことだけ考えていたわけではない。

いったい、蘇ったハスがどうして開花する時季を知ることができたのだろうか。こうなるともう歴史への関心を超えて、生物の死と再生の問題である。ひとは、遺伝子の情報(DNA)がそのようにプログラムされているから、と多分説明するだろうが、それで何かわかったといえるのか。恵泉学園のある神奈川県伊勢原市は、温暖で陽が燦々とそそぐ地形にある。そこでハスは深い眠りから覚めて、そして五年後に開花した。もし、もっと季節の変化の乏しい地方でこのハスを育てたなら、どうなるのだろうか。

十二月になり、新潮社の『波』を掌にして、わたしは溜飲の下がる思いをした。滋賀大学学長の日高敏隆氏も、連載「猫の目草」でこんなふうに書いているではないか。

ハスは、どうやって季節を知るのだろうか？

雪国ではない彦根で、春になると、ちゃんと若葉を伸ばし、また、十月ともいってもまだ暑いくらいなのに、秋の冬枯れがはじまる。

生きものには時計がある。時計はどこかで時刻をあわ

そのハスが、もしかして「大賀ハス」のように開花しないものかと、それで故大賀一郎博士門下の、長島時子教授(恵泉女学園)に、培養を依頼したのである。

その一粒が五年前に発芽して、それから待ちに待った「ハス、咲きましたヨ」の報せであった。

わたしは、なぜ泰衡公の首桶にはモモヤクルミでなくて、ハスの種子が入られたのか。だれがそれを、と思いつめくらしめた。そこから、首級そのものを金色堂に納めた人物が推定される。さらに「忠衡公首級」として、事実には非ざる寺伝が作られた事情も見えてきた。

拙著『平泉中尊寺』が、すでに再校の段階に入っていたが、平泉滅亡直後の虚と実にかかわってくるので、追加執筆した一節を挿入させてもらった。その際、たまたま『草笛』八月号のなかで目にした間淵うめ子氏の

逆縁の柩に母の種袋

の句が、思索の手掛かりになった。ハスの種子は往生の縁、一蓮托生のよすがとして供えられたものと信受された。ハスの開花と「種袋」の句によって書けたことである。

せなければ役に立たない。生物は朝の日の出で時刻をあわせている。けれど、一年の季節を計る時計というものがあるのだろうか。どうやって合わせるのか、まだ謎である——と。

そして、『寒雷』一月号で宮慶一郎氏の句

呉れてやりし枯蟪蛄のその後問ふ

に接した。「蟪蛄」とはカマキリのことである。やはり金色堂の中から、カマキリではないがコオロギの枯れた屍が発見されている。壇下の首級(泉下の泰衡)は、その鳴く音を聴いただろうか。

泰衡の最期は、『吾妻鏡』にその挙動を「鼠の如し」と記されている。顎や歯並びから診て、体格も華奢であったらしい。わずか二年しか平泉を保つことができなかったのだから、藤原三代といっても四代といっても文化史的には変わりはないが、三十五歳で絶たれたその人生は、無ではない。『草笛』二月号、平野冴子氏の

何をもて一生といはむ鱗雲

の句がなにかまた、心にのこる。

『草笛』(宮慶一郎主宰) 6月号より

## 〈ハス二題〉 中尊寺ハスと二つの俳句

蝸牛社社主 荒木 清

七月十七日の土曜日、中尊寺から思わぬ電話をいただいた。「ハスが今日咲きました。明日の早朝が見頃ですよ」と佐々木邦世さんであった。邦世さんは中尊寺円乗院の住職である。彼はまた、中尊寺の仏教文化研究所の主任で、中尊寺の歴史・文化の研究を生涯の課題とし、『平泉中尊寺―金色堂と経の世界』（吉川弘文館）を出版されたばかりの人である。

この電話は我が家にとってもちょっとした興奮をもたらした。まずは妻と娘がすぐ行くと決めていた。私は仕事上の煩悶の中にあり、迷った。しかし、あの蓮は昨年、八〇〇年の眠りから覚めた希代の蓮であることは知っていた。私は「そうだ、写真を撮らせてもらおう」と一人ごちた。これで迷いはすっかりふっ切れていた。

午前0時に家をスタートした。外環・東北自動車道路をひたすら中尊寺へと向かった。途中から雨で、撮影のことに喰に黒い柱を基調とした二階建ての家は別世界の雰囲気を持たずまかせていた。玄関に入ると正面に掛軸があった。近づいて見入ると、

光堂かの森にあり銀夕立 青邨

とあった。青邨の直筆である。色紙倍判大の好ましい墨痕であることもさることながら、句にふさわしい軸装であった。生まれ故郷に近い中尊寺は、青邨にとっては縁の深い名刹である。中尊寺芭蕉俳句大会の選者も務めている。ほかに「中尊寺門前さやに菖蒲茸く」もある。

光堂の句について青邨門下、「屋根」主宰の斎藤夏風氏は次のように解説している。「盛岡に向う車中、平泉、毛越寺前から中尊寺への田圃のひろがる道にさしかかったとき、夕立が来た。強い雨脚、しろがねの雨だった。銀の矢を感じたという。向こうの森には金色堂がある。夕立はまたたく間に中尊寺を降り包んだのだ。銀と金の配合だが、単なるとり合せと違う。夕立の現場に立って、写した一体感がある」（蝸牛俳句文庫『山口青邨』）。

二階の窓はすべて開かれていた。そこからの眺望は、梅雨も終わりを告げるころの深い緑一色であった。おかゆを

が気になった。一閃インターに近づくと雨は止んでいた。当初の予定通り、五時すぎには一閃インターを出、半ごろには金色堂の下の水田脇に着いた。

一角の簡単な柵の中に四、五人の人がいた。近づいて目を凝らしてみると、鮮やかなピンクが飛び込んできた。蓮の周りが有り難いほのかな光につつまれていた。

三つの鉢に植えられた中央の蓮は開き始めたばかりであった。想像したより色の濃い、しかも高貴な色合いは、紅という言葉だけではふさわしくないと思った。

「写真を撮らしていただいてよろしいでしょうか」とすでに三脚をもち、シャッターを押し続けている人にたずねた。私は邦世さんとの待合せの前であることが気になったが、車からカメラを一式取り出した。

邦世さんご夫妻が六時半ごろ黒い車でやってきた。清瀬の内海隆一郎邸以来の再会であった。

金色堂の棺の中から蒐集された蓮の実を、故大賀博士門下の長島教授に培養を依頼したなどの説明をひとしきり受けたあと、「うちでお茶でも飲んでゆきませんか」と邦世さんは誘ってくれた。久し振りの桜本坊であった。白の漆

ごちそうになったあと、邦世さんは「毛越寺へ抜ける途中、楸邨さんの句碑を建てました。六〇トン以上もある大きな石です」と言った。楸邨は句碑を建てることを嫌ったが、例外として二碑ある。もう一つは隠岐である。私たちは青邨と逆の方向、中尊寺から毛越寺へと鈴懸の径を向った。小高い山の稜線をゆくとすぐ右手に四阿があり、巨大な石が据えてあった。石碑の右中央に、

邯鄲あんなやみちのおくなる一挽歌 楸邨

とあった。この箇所から達谷たつたに窟くわは近い。そこは弥生の渡来人に追いやられたみちのくの人かたてこもったところである。楸邨はこの名を自分の書齋の号としていた。

「雁坂」主宰の中嶋鬼谷氏は、この句の解説を次のように結んでいる。「楸邨は被抑圧者、被征服者に深く心を寄せる姿勢を終生貫き、自らも「被る側」に身を置く詩人であった」（蝸牛俳句文庫『加藤楸邨』（近刊））。

この句碑の周りは刈り込まれてあるものの、夏草に覆われていた。そのなかに小さなねじり花を見つけた。可憐なピンクであった。



## 新知見と「結論」

「学術調査の結果を覆す」との新聞報道に思う

去る五月十四日の『読売新聞』（夕刊）が、「藤原三代の遺体特定」との見出しで、つぎのように報じた。

藤原三代の遺体のうち、どの遺体が秀衡と基衡かが歴史のナゾとされてきたが、遺体が身に着けていた絹布の化学分析から明らかになった。結論は「お堂に向かって秀衡が左で基衡が右」。

と、中条利一郎・帝京科学大学教授らの研究結果で、そう判明したのだという。

「核磁気共鳴（NMR）」と呼ばれる分析手法を使い、死に装束の絹布に含まれるアミノ酸の種類を測定。さらに、絹糸を吐くカイコを実際に育て、気温が何度のときにどんなアミノ酸が多いのかを調べた。

その結果、お堂に向って左の遺体の絹布のほうが高温時

に作られたことが判明。当時の木の年輪から割り出した気温データによると、基衡より秀衡の死亡時の気温が高かったため、「向って左が秀衡」とする結論になった。二十七日から京都市で始まる高分子学会で発表される、と報じている。

翌十五日に、『読売』の岩手支局からこの件について中尊寺に問い合わせがあった。ちょうど在寺の菅野澄順氏が電話を受け、「絹布だけで死亡時期が特定できるものではないし、今のところ定説を変えるつもりはない」と返答したが、翌日の『読売』岩手版は、「向かって左秀衡、右基衡」の見出しで、金色堂内陣カラー写真付きで報じた。

『日本経済新聞』は「遺体の並び順に新説」と慎重であったが、二十四日の『山梨日日』に至っては、「奥州藤原氏三代を特定」の見出しに「秀衡と基衡の遺体逆だった」と横組み。「一九五〇年に当時の研究者十六人が行った学術調査の結論を覆す結果となった」と、いささか巷間読者の興味をそそる書きぶりである。

一読して、なんとも不可解、不審でならない。

まず、分析したその試料は、どこから入手したのか。保管されていた器具に、何と記名されていたのか。それはだれがいつ記示したものか。試料の確認が落ちている。

そこで、試料の絹布入手経路を中条氏に照会したところ、東京国立文化財研究所の川野辺渉主任研究者（当時）が、平成四年に倉庫を整理して当該試料を見つけ、それで大学時代に教えをうけた中条氏にNMRスペクトルを測定してほしい、ということになったものらしい。

### 〔疑問〕

1. 棺内に遺っていた服飾品が、必ずしも死亡時に紡績・製縫されたものとは限らないではないか。御館の死期の近いのを知って新調したとしても、少なくとも前年ないしは数年前の繭から紡ぎ、織ったものを製縫したとみなければならぬ。棺底錦などの文様には、むしろ尚古趣味や将来品の可能性も伺われるのであって、棺内絹布のアミノ酸組成から見積もった気温の比較だけでなく、単純に遺体を特定することはできない。

なお、新聞には「身に着けていた」とか「死に装束」「付着」と書いているが、「秀衡棺の釘朽ち候故か、

四方へ放れ開き申候」といった状態に大破していた時期もあった。つまり、棺内の副葬品が必ずしも原態を留めているとも断定はできないのである。

2. 中尊寺が寺伝「左壇は基衡・右壇が秀衡」を、拜む方から向かっての左・右、と解釈を改めたのは、昭和二十五年の学術調査およびその後の諸氏の研究成果を踏まえてである。すでに指摘されているように、

(1) 伝基衡棺内から五条袈裟や水晶念珠が発見された。文献史料によって、出家入道していることが知られるのは、藤原三代のうち秀衡だけである。

(2) 伝基衡棺内から伝忠衡（泰衡）の上切歯が発見され、その泰衡の首桶の中から発見された甲狀軟骨の化骨が伝基衡の遺体のものであることが確認されている。しかも首桶の中から伝基衡棺底の錦と全く同じものも発見された。このことから、首級がいったん伝基衡棺内に納められたものと認められる。とすれば、それは祖父の棺より実父の傍らに納めたとみるのが自然なわけであり当然のことであろう。

といった所見に対し、どう整合性が求められるのか。

3. 中条氏が、気温を比較された基衡の没年とは何にやったものか。基衡没年を直接記した確かな史料は無い。近世の諸書に保元二年（一一五七）と見えるだけで、それで一応、その頃として大きくは誤りないだろう、というだけである。それを動かないものとして、年輪から割り出したその年の気温を比較したでは、いかにNMRの手法がすぐれていても、土台が不確かなのだから「結論」とするのは無理である。

4. さらに、「木の年輪から割り出した気温データによると」と記事で説明しているが、奈良文研の専門員に尋ねたところ、「統計的な年輪幅からどれだけ気候を読みとれるか、現段階ではまだ難しい問題です。冬期樹木の生育停止期間はつかめても、蚕の生育期の気温については……。安易にデータを依拠とされるのも如何なものでしょう、個人的な感想ですが……」と。

## 季語に寄せて

〈不動堂の栞〉



〈第十七号〉十一月

丕の如き小春日和を授かりし 松本たかし

旅／心の風景―「朝日」(十一月十九日夕刊)

漫画家の「中尊寺ゆっこ」さんが、「平安時代へS F的墓参り」と題してこんな文を書き、写真と文でほとんど一ページに大きく取り上げた掲載紙を、送ってよこした。短く抄出して、ここに紹介しよう。

この七月に結婚し、夫と夫の両親と共に、生まれて初めて中尊寺を訪れた。漫画家になって十二年。こともあろうに一度もお参りしていないのだから自分でも呆れる。し

ところで、中条氏の発表要旨は次のようなものであった。

〔目的〕現存の蚕を異なる温度で飼育し、アミノ酸組成の温度依存性を求める。

〔結果〕アミノ酸モル分率の数値が藤原三代の絹の数値を覆っているのは、(三種の蚕のうち)「はばたき」だけであり、これについて清衡、基衡、秀衡の死んだ時期の気温を見積もると、それぞれ27.1/26.2/27.5℃となる。

現存の蚕の絹の分率数値から割り出して十二世紀の絹を分析する、その辺にもなお検討の余地はありそうにも思う。中条氏からFAXが届いた。

「いずれも今回の発表とは間接的にしか関係のない基衡、秀衡錯誤の問題だけが記事になってしまった」(6/9)

『山梨日日』の記事は新聞記者がよくやる手法で、私の方法では、これ以外の結論は出ません、と言ったのを、私の方法から自然科学一般に拡大されたものです」(8/23)

真実は単純なところにある、であろう。が、もはや遺体そのものからの新たな情報でもなければ、否定も断定もできないように思われる。

(文責／佐々木邦世)

かし何か人生の節目に心して訪れたいと思っていた。

「ああ。私ったらこんな国宝のお寺を勝手にペンネームにしてバカな漫画書いて穴があったら入りたい！」そんな気持ちで中尊寺へ向った。

不動堂では祈祷をお願いした。私は僧侶の方に漫画家であることを名乗り、これからもよろしくお願いしますと言って、願い事の選択の欄にある家内安全、交通安全、安産、商売繁盛など四つに丸をつけた。すると、お坊さんは「ひとつしか祈祷できませんよ。こんなにたくさん選んで……あなたの漫画みたいですね」と笑った。

「中尊寺ゆっこ」という名前は、以前、新聞の雑誌広告で目にしたことがあった。彼女の漫画を見たことはなかったが、願い事の欄にいっぱい丸して「ハイ」と出されて、性格そのままのように思われ可笑しくて、「あなたの漫画みたいですね」と。

でも、勝手に名前にしたことを気にかけていたわけで、お参りする気になっただけでも好しとしよう。きつと彼女、今の行き詰まりを乗り越えられるのではないかな。

辛抱して、故障や限界説を乗り切ったのが琴錦閣です。御縁あって、中尊寺節分会には毎年佐渡ヶ嶽部屋から閑取を歳男に迎えてきました。いつも、場所前の不動護摩供には必勝祈願を修してきましたが、久々の快挙でした。小柄な琴関が大輪の華を咲かせたわけです。

冬菊のまよふおのがひかりのみ 水原秋桜子



### 〈第十八号〉十二月

平成十年は、本当にいろいろありました。ふりかえて見ますと、「は」行の活字が新聞に頻出していたように思います。

「は」破産・破綻、「ひ」ヒ素中毒、「ふ」不良債権・負債総額に「不適切」、「へ」閉塞状況、「ほ」は崩壊(学級)

から保険金詐欺・ボキヤ貧・防衛庁まで。

しかし、……

御破算で願いましたの破産にて

ようやくひとりのにんげんとなる 島田修二

ものごと取りよう、考えようです。不景気だと本を読む人が増える、とも。

歳の暮れ、中尊寺でもお正月を迎える準備で人は忙しくしておりますが、うっすらと雪化粧した境内は、まさに静寂です。

雪吊のあたり明るく暮れにけり 上島顕司

そして、間もなく新しい年です。

この師走納めの護摩祈祷の御札が皆様のお宅に届くのは年の内でしょうか。あるいは御遠方のお宅には、新年になってからも知れません。長期予報ではこの冬、雪が多いとか。積雪に慣れていない地方の方、特に御高齢の方は足

元すべりますので、くれぐれも気をつけていただきたいのです。

初電話いたはり合ひておない年 今井つる女

老若みな様に、どうぞ佳い一年でありますよう祈念申し上げます。 合掌

### 〈第十九号〉一月



正月三が日、平泉は、空模様も人出も「まあまあ」といったところでした。

この「まあまあ」「ほどほど」がよろしいのですね。いつも右上がりばかり志向して、それのため息ついているより、世の中「可しとする」ことも大事です。

三ヶ日 静かにあれば 静かに過ぐ

松崎鉄之助

初暦 知らぬ月日の 美しく 吉屋信子

処方箋 御生大事と 去年今年  
〔読売俳壇〕／足利市 金井寿美子

豪雪は、過去の計算からすると十八年サイクルとか。昭和三十八年に新潟で五メートルの積雪、新潟出身の学生がほとんど屋根の雪下ろしに帰省したのを思い出します。次が昭和五十六年でした。そして、今年が十八年目になります。所詮、人知は自然の恵みにも猛威にも到底及ばないのですから、せいぜい用心することです。

〈第二十号〉二月



一月二月、厄歳の方が、厄を払ってもうひと踏ん張り、と願われるのはごく自然なことです。まして、現在、病氣されている方なら病氣平癒を祈る気持ちは切実です。でも、だれも老も死も避けることはできません。避けるべきものではなくして、うまく付き合うことなんですね。

返事して また教忘れ 毛糸編む

〔読売俳壇〕／埼玉県 上村淳吉

もうろくの ろくまでいかず もう辺り

ときどき孫の名 まらがいて呼ぶ

〔読売歌壇〕／福島県 黒沢正行

日ごろ身に覚えのある方も少なくないでしょう。わたくし

の亡くなった祖母などは、口にまかせて子供・孫の名をみな呼んで、それで呼びたい当人の名がつかいに出不ないと、「いいかげんに、気がついて返事しなさい」と、周囲を叱ったものです。そのくらいで、いいんですよ。  
この冬は風邪（インフルエンザ）が大流行でした。

山門と 出てゆく咳の ひとつかな 大崎紀夫

老僧の 起きぬけ咳の 十ばかり 伊藤柏翠

老僧の 天下無双の 大嚏くしゃみ 萩原豊彦

〔毎日俳壇〕／伊万里市

可笑しみ（俳諧味）満点、の評。でも、どうぞ風邪にはくれぐれも御用心を。

〈第二十一号〉三月



電柱に耶蘇イエスすぐ来ると大書せる

下に小さく「南無阿弥陀仏」

〔新折々のうた2〕より 傳 彩澄

傳さんは、台湾の方です。毎年、十二月に入ると台湾からのご参拝が多くなります。白い雪と赤いリンゴと、金色の堂が目当てというのですが、とにかく、節分の豆まきのころまでほとんど毎日のように、賑やかな中国語会話が、中尊寺の境内に響きます。

そして中には、添え護摩木に大願成就・商売繁盛と、さすがに漢字の国です、字も見事に書いて、熱心に拝んでいられる方も少なくありません。

みらのくの 緑は露つゆの臺たいよりぞ 福田夢汀

しかし、生態系に異常をきたしたのでしょうか、近ごろ露の臺を探すのも、なかなか容易ではありません。あるいは、ダイオキシンの影響？と勘ぐるのは拙速でしょうか。

例のテレビ朝日の「ダイオキシン」の一件、あれは正確でなかったわけだけでも、騒がれてから、ようやく腰を上げる国の役所仕事にも、調査して報告を渋っていたJAさんにも、責任ないとはいえないですね。

「南無…」といえは、こんな句も、

赤い根のところ南無妙法蓮華はつれんぎょう草 川崎展宏

「妙法蓮華経」を妙ホウレンソウと。

さて、みらのくにも、春。

足元と 彼岸の水が 流れぬる

宮慶一郎氏の佳句を御紹介して、いよいよ梅・桜の季節です。

〈第二十二号〉四月

花あれば 西行の日と 思ふべし 角川源義



今年は何年より早い早いと報じられていた桜前線、途中関東に入るあたりから遅々として足踏み。ようやく、福島県に入ったかと思ったら、一週間を経ずして通過。

大層に 考えずとも 春の山 花谷和子

と。そう思い、こう書きされる作者は、まさに時の移ろいにも達観している。だが、だれもがそうはいかない。花が咲けば咲いたで、はや散るを嘆き、人の世を思う。

人の世は 命つぶてや 山桜 森 澄雄

ここの「人の世」は、世の中、世間の意味ではなくて、生きてきた歲月であり、「いのち」と解説されているようです。そして、

見頃など なかりしごとく 散りぬると

葉桜となりて 青葉燦燦 島田修二

さて、毎年五月になると、大学生の五月病です。この春何とか大学に入れて、アパートも見つかって、登校はするのだけでも、キャンパスの一人ひとりがみな孤独で、居場所があるようで無い。緊張感も薄れて、気がついていたら自分は何？……なんて悩む。高校時代、悩むことを先送りしてきたひとは深刻です。そして親も……。

朝に見て 昼には呼びて 夜は触れ

確かめをらねば 子は消ゆるもの

河野裕子

この河野さんが中尊寺西行祭短歌会、今年の講師・選者。

〈第二十三号〉五月

おみくじの かたく小さき 結び目は

毘多のごとく 縄とつかみぬ

〔産経歌壇〕／藤沢市 谷口 香



修学旅行のシーズンです。中尊寺の参道にも生徒さんの若い声が行き交って、雨の日でも華やいた気分があります。引率の先生の後を並んで団体行動、などというのは二昔以上前の話です。いまはオール自由行動みたいなもんです。ところが、様変わりしても変わらないのが、「おみくじ」への関心です。

「ナニ、ナニ。えーエ、わたし末吉。どうしてエー？」  
「ウッソー」

これが、会話の定番です。

毘陀多は、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』に出てきます。頭

の上に垂れ下がってきた蜘蛛の糸を手繰って懸命に登っていくわけです。地獄から抜け出ようと必死(?)。ふと、下を見たら大勢の者が後から同じようにのぼってくる。「糸が切れる…」と叫んでしまう。折角、地獄から救われるところだったのに。その、自分だけなんとかして、というエゴさえなければ……。

でも、どうでしょう。生徒さんが、もし受験合格を祈っておみくじを結んだとしたら、毘陀多を引き合いにして、「自分だけは、という、そういう考えはエゴだ」などと、だれが言えるのでしょうか。他を蹴落とす社会の仕組みをつくってきたのは、われわれ大人社会なのです。

学生時代は、大いに言い合ったり、悩むがいい。切磋琢磨、受験もその一つサ。それで少しは足腰強くなるし、免疫もできる。

それよりも、「糸が切れる…」と怒鳴る前に、自分がキレてしまうのが問題です。

燕とぶ 常識社会 まっぶたつ

〔朝日俳壇〕／川越市 岡部律子

蝸牛 いつか衣袂と 子ばかりす 加藤楸邨

紫陽花の 重さ抱へて 登校す

〔朝日俳壇〕／浜松市 戸塚晃彦

悪も、弱いのも、駄目な奴も、いい。いるから、いいのです。

〈第二十四号〉六月



梅雨晴間 老人大学 閑校す

〔読売俳壇〕／伊丹市 平喜美江

隣の公民館では、老人といわず「成人大学」と称しております。月に一度の歴史学習に講師を依頼されました。

はじめ、軽い気持ちでお引受けしたところ、カリキュラム

を見て驚いた。毎回二時間ずつ六回続けて、あろうことか、

あの鎌倉幕府の編さんになる『吾妻鏡』を、楽しく読んで

ほしい、というのです。受講者六十名の中には、これまで

十年間授業を続けてきて、皆勤賞の方が十名もいらっしや

る。その、ご熱心さはただただ敬意を表するばかりでし

た。

夏瘦の わが眼光を もてあます 榎本冬一郎

そういう風貌の方も実際おられました。しかし、

三つのうら 二つ忘れぬ やがて三つ

全部忘れむ 老いおとろへて

〔読売歌壇〕／吹田市 鈴木基充

受験勉強ではないのだから、それでいいじゃないですか、と申し上げたい。

悠々自適、どこかに出掛けるのもいいですね。ただこれも、

血圧は とまかく夏の 旅支度

〔大塚薬報〕俳壇／新潟県 押木大晃

となると――。お気持ちはわかりますが、どうぞ無理をなさらないで。

九十と いつか越えたり いつか夏

阿部みどり女

そうあっていただきたい。

〈第二十五号〉七月



念力の ゆるめば死ぬる 大暑かな 村上鬼城

今年は、七月二十三日が大暑。梅雨明けも間近、と期待

しながらも、この暑さには気をしっかりと持たないと身がもたない。それを「念力」といったのでしよう。

「評論家の江藤淳氏が自殺」の一報を耳にして、悼みつつもやはり残念でなりません。夫人の死とわが身の病苦から、「生」に倦み、自己を放棄された。しかし、世の中には、「なんでこの私が癌に……」と苦しみながらも、頑張っておられるひとが大勢いるわけです。「死」は、向こうから来るものであって、予約したり割り込んで自ら断つとか、こちらが沙汰すべき領域ではないのです。

蓮の葉の 裏に届ける 蕾かな 松藤夏山

棺の中から蘇生して、昨年八〇〇年ぶりに開花した「中尊寺ハス」が、今夏は境内の大池跡の地に開花しました。金色堂すぐ近く、まさに「浄土の花」です。生命の尊さがあらためて思われた。花びらは四日にして地に落ちます。

得度せるごと青はらす現はるる

〔朝日俳壇〕／横浜市 松井さだ子

お寺の境内の蓮であればなおさら、青いはちすを「得度せ  
るごと」くに見た、作者の興趣が領けます。

どうぞ、夏負けさせぬように。

### 〈第二十六号〉八月



正直言って、本当に暑かったですね、今年の夏は。

戦国の世、武田方が織田軍勢に包囲され、甲斐の恵林寺  
に火をかけられたとき、禅僧快川は、山門上に端座して  
「心頭滅却すれば火もまた涼し」とのたまった、とか。

しかし、普通の人間には心頭滅却などできません。常人  
にできないことを仮定した言は、常人は容れないものです。  
ところが、この説話がよく知られているのは、近世以来の  
精神至上、志操偏重の教育によるものです。

暑いものは暑い、無理しない方がいいですよ。

先日、テレビで若者達が「終戦ってナニ？」って真顔で  
聞き返していました。

一分と きめてぬか俯す 黙禱の

「終り」といへば みな終るなり

竹山 広

何も終わってはいない——と。そうかも知れませんね。

それに、「天災は、忘れたところにやってくる」と言った  
のは物理学者で俳人の寺田寅彦でしたが、どうも最近  
は、天災も人災も忘れないうちにやってくるみたいです。

トルコの大震災には、全くことばありません。親日感  
をもった人が多い国とか(産経新聞)。一日も早い復興  
をと願わずにはいられません。

この一月のうちにも、残念ながら「あるまじき事」が随分  
ありました。

人ごとと思へぬ話 秋の風

星野立子

### 不動堂様

産後から頂いている月牒が今月も届き、大変有  
難く思い、早速、神棚に納めました。

最近、夏の疲れか体に今までにない不調を感じ  
通院の日々です。

「季語に寄せて」第二十六号は、共感しました。  
心身ともに、弱っているから余計に——。

お盆に久しぶりに中尊寺にお参りし、心が清め  
られるというか、魂が浄化されるようでした。  
もちろん不動尊に寄り、毎月の御礼にと手を合  
わせ、護摩木に気持ちを込めて、「當病平癒」  
と書いてきました。

平成十一年九月二日

(宮城県 T)

### 〈第二十七号〉九月

現在、全国の『俳誌』は八〇〇誌を越え、これに各地の  
カルチャー誌も二〇〇誌近いそうだから、俳句人口は夥し  
い数になるでしょう。若い人のあいだでも、俳句への関心  
が高くなっているようで、結構なことです。

我高三予備校わきの百日紅

(「朝日俳壇」岩井市／富山陽子)



学校の行き帰りに予備校の近くを通る。そばの「さるすべ  
り」がやはり気になったのでしよう。

高校三年生の夏も終わり、日に日に深刻になる季節です。  
短歌の方でも——。この春、無事大学に入ったのはよかつ  
たが、若さを持て余している人も——。(わが息子も)

試験から解放された毎日と

自由の刑に処せられている

〔朝日歌壇〕神戸市／江島詩織

ゆで卵の皮が嫌いという君の

繊細でない電話の切り方

〔読売歌壇〕藤沢市／岡田貴信

いろいろあるわけですね。同じ「電話」でも、あるていど世の中が見えてくると――

手短に切れし電話の涼しさよ

〔朝日俳壇〕岐阜県／奥井朱夏

となる。そして、さらに人生を諦観されますと、

ああそうか そういふことか 秋の風 多田道太郎

そう、映画のあの笠智衆の口調ですね。日常の、清々しい

枯れた姿です。

不動尊様の御縁日に私の無病息災を祈念して頂き、お陰様で無事元気に過ごしております。

「季語に寄せて」、とても楽しみでございます。朝晩は「秋の風」が吹いて、虫の声も聞こえます。大正生まれですので、笠智衆さんは、映画の思い出がいっぱいあり、懐かしいでした。

十月二日 加茂喜代子

〈第二十八号〉十月



夏から急転して、冬近しの感じが致します。季節の移ろいは早い。

敗荷やれはすの茎にみどりの残りけり

〔毎日俳壇〕姫路市 浜野正美

この夏、連日朝早くからカメラで覗かれ、観光客の足を止めた「中尊寺ハス」も、今は文字通りの「敗荷」に。

冬に入る前の底抜け晴れなりし

〔読売俳壇〕東京都 小菅暢子

木には木の人には人の秋の暮 原田 喬

移ろうのは草樹の装いだけでない、そう詠んだ原田喬氏もこの三月に亡くなった。

さて、当世、御祈祷申込みの事情は――、

不景気ですは「事業隆盛」を、就職難は水河時代。そこをなんとかと「就職成就」。そして高齢化社会を反映して、それも結婚の高齢化と、人生の高齢化とがある。

結婚しない、のではなくて、当面考えないで先送りしてきた善男善女は多いみたい。

かなかなや いい人居ぬか 会へぬのか

〔朝日歌壇〕古河市 斎藤玲子

太鼓たたいて「良縁成就」を祈りますが、当人に心からの気持ちがないと無理。長生きの方は、長寿と言えはおめでたいわけですが、老いはたしかに四苦の一つ。

まっぶさに「戌吉晩年」読みゆけば

今や愛しき 老いというもの

〔朝日歌壇〕東京都 志摩華子

選者の島田修二氏は、この「愛し」を「いとし」と読むか「かなし」と読むか、それは読書次第、とことばを添えておりました。問題は、そこなんです。

\* 柴「季語に寄せて」は、不動堂にご祈禱を申し込まれた方に、月牒に添えて隔月に発信しております。



# 聖地五臺山 随行記 抄

菅野 宏紹

明年、當山が慈覚大師開山千五十年を迎えるにあたって、大師の德行、なかでも顕著な入唐求法巡礼の聖地五臺山を、今夏、貫首に巡拝していただくことになった。

平成十一年七月二十日(火) 晴

正午

貫首、中尊寺出発。記者、随行する。

\*車中、貫首は慈覚大師(円仁)の『入唐求法巡礼行記』をあらためて披かれて、すでに思いを聖地に致されていた。

七月二十一日(水) 晴

一一時二〇分 予定より少し遅れて成田空港を離陸(NH九〇五便)

(以下、中国時間)

一三時一七分 北京首都空港着陸。

山西省の中国国際旅遊社日本部長鄧仁有氏・中信旅遊総公司呉慶斌氏の出迎えをうける。気温三二度

一五時

景山公園着

三百段登りきると、故宮紫禁城を一望できる望古台あり。

二二時

中国東方航空MU七一〇Z便にて太原に向かう。

二二時五三分

太原空港着陸

\*《途中情報》山西省は、埼玉県と友好関係を結んでいるが現在は岩手県との交流が深いこと。太原市は日本の姫路市と友好関係を結んでいて、人口は二百万人。

二二時四〇分 山西大酒店着(宿泊)

七月二十二日(木)

八時四〇分 山西大酒店出発

\*昨晚より交渉していた車の件は、鄧氏の配慮により、山西省人民政府府要人専用車(トヨタレクサス四〇〇〇cc)に変更してもらおう。途中、太原駅前を通り、市内の朝市の様子などを見ながら進む。

九時

朝陽街ICより原太高速道路に入る。中国の高速道は、一部の階層しか利用しないので、追い抜く車もなければ対向車もない。

九時三〇分

忻州ICより高速道路を出る。

太原〜忻州間八〇km。付近は左右ともトウモロコシ畑。

九時五〇分

定襄県

ここから五臺山まで二二〇km。

\*米国大統領が訪中の際五臺山参拝の計画が一時あったため道路はすべて整備、舗装されていた。

一〇時一五分

五臺城まで一五km手前の地点で南禅寺参拝のため左折する。



南禅寺へ向かう

一〇時四〇分

南禅寺手前1km付近で道路が寸断されており、車を降りて徒歩。  
南禅寺着

南禅寺大殿は唐の建中三年（七八二年）に建立。中国国内における最古の建築物で、文化大革命の破壊から逃れた。

特別に御堂を開けていただき、参拝させていただく。読経の後、諸仏の説明を受ける。堂内には唐代の仏像が十七体現存するが、貫首は特に仁王像と手をつないでいる観音像に興味を示される。写真撮影を希望されたが、許可されず断念。

一一時

南禅寺発

運転手は相変わらず時速一五〇kmで走行しているので、急なカーブの時は、その都度に貫首も随員も左へ右へ。

豆村鎮の街にさしかかる。

一二時三〇分

五臺山山門に到着

門は表と裏に額が掲げられている。表は康熙帝の筆になる「五臺聖境」、裏は中国仏教協会会長趙撲初先生筆の「仏教聖地五臺山」の文字が。友誼賓館着。昼食「アワのあんかけ餅」があり、貫首のお口に合ってご満悦の様子。小休息。

一三時

一四時

賓館出発。

一四時五〇分

菩薩頂に到着。

菩薩頂裏門より黛螺頂を遙拝する。古来より菩薩頂は文殊菩薩の道場、ここを真容院又は文殊院とも称される。現在はラマ教寺院に。木牌楼上の「靈峰勝境」の四文字は康熙帝の直筆。



「五臺聖境」康熙帝筆

\*貫首は、裏門口の左右に掲げられていた「聖凡到此須」「當門過心来」の文字に強い感銘を受けられた様子。

真容院本殿では、丁度法要の開始時刻であったようで、寺の長老や僧侶達が本殿に入室する様子を見ることができた。その後、乾隆帝が六回にもわたる五臺山参拝の情況と感想を、漢・満・モンゴル・チベットの各文字で記されている碑文を参観して、一〇八段の石段をゆっくりと下り、五臺山の総本堂として位置付けられる大顯通寺に向かう。

一五時四〇分

大顯通寺着

開成五年（八四〇）五月十六日、当時、大華嚴寺と称していたこの寺院を慈覚大師が参拝されている。

大師はこの寺院で志遠和上の「摩訶止観」の講義を聴聞されている。志遠和上は慈覚大師に謁され、日本天台の興隆を問われたと云う。大師をして「文殊所化の想いを起こさし」めた寺院である。

\*大雄宝殿内は繞仏法要の最中で、貫首は外陣にて礼拝、ご宝前に報恩の誠を捧げられる。

五臺山寺院群の中で最大の仏殿で、千人が入れる程の大道場である。この日も百人程が「南無阿弥陀仏」と唱えて行道していた。

大雄宝殿後方の無量殿（明代建立）を参拝。その後、銅殿を参拝す。明代に建立されたこの堂舎は、寺伝によると、妙峰法師が全国一万户以上の家から托鉢して集めた十万户斤の生銅を鑄造して竣工、一万尊の仏像が安置されているともいわれている。

\*貫首が銅殿参拝の後、山門に戻られる途中、先程大雄宝殿で繞仏法要を修していた僧侶達が「禅堂」に入って行くのに出会う。「念仏法要の後に禅の修行を行ってゆくのだろうか」と、絶やまぬ求法の僧侶達に、敬意を示された。

一六時三〇分

羅暎寺着

五臺山五大禪場の一つ。創建は唐代。

\*貫首、羅暎寺大殿にて、「現仏蓮花」をご覧になる。これは殿内に木製の大きな蓮花につつまれた仏が、徐々に蓮花が開花しその姿を現す、という仕掛けを施しているものである。「ちょうど中尊寺の蓮も美しく咲いており、現仏蓮花に遭遇し得たのも文殊菩薩の御導きが……」と感激される。

一六時四五分

塔院寺着

元は顯通寺の塔院であったが、明代に舍利塔が再建された。太白塔は高くそびえて五〇m余りの高さ。まさに五臺山のシンボルである。

一七時二〇分

小休憩、貫首より「明日の予定を変更しても五臺山に滞在して、慈覚大師のご足跡を巡拝したい」との意向を受け、随員、通訳等と日程を調整。専用四輪駆動車を借り切り、五臺山全てを巡台する。二十四日は、慈覚大師が十五日間逗留された竹林寺と、大師が金銀交書一切経を閲覽された金閣寺を参拝して、午後太原に戻ることにして、地元の五臺山巡台用タクシー営業所へ行き、交渉。

七月二十三日(金) 快晴

好天。慈覚大師の御陰と感謝され「羯諦羯諦……」。

七時三〇分

朝食(バイキング)『杏の種の漬物』が美味。

八時二〇分

賓館出発

\*昨日予約した四WDのジープに乗車する。

本来五人乗りの車であるため五人分の乗車賃を支払うことになる。

北台、東台、中台、西台は一日で回れるが、南台はその日の内には無理だろうとのことだったが、天候に恵まれ、運転手の好意でこの日の内に五臺全てを巡台することになった。

九時一〇分

東台頂着 標高二、七九六m

望海寺 聡明文殊菩薩を参拝(般若心経、大師宝号)。

東台は慈覚大師が惟眺と共に、「永世に文殊の弟子とならん」ことを誓った所である。大師参拝の頃は『台頂に三間の堂あり。石を壘ねて牆となす』と記されているが、現在それらはない。

貫首、東台頂より北台、中台を遠望される。正しく「清涼山」の別名が適した地である。気温は三〇度近くになっていた。

九時三〇分

東台頂発

東台頂から下りてくると、大同に通じる舗装道路に出る。五、六〇〇m進み、左に折れると、またでこぼこ道に入る。車の揺れも一段と激しい。

北台へ向かう途中、牛や馬が放牧されていたり、山道補修車両が作業をしていたため、度々車を止めて待機することとなった。我々には丁



東台頂より 北台(右) 中台(左)



臺懷鎮・シンボル太白塔



顯通寺禅堂

度よい休憩と山の空気を吸う時間。

\*貫首はまた『入唐求法巡礼行記』を味読されている。

一〇時四五分

北台頂着。標高三、〇五八m。

靈應寺 無垢文殊菩薩を参拝。

北台は五臺山上で最も標高の高い地点である。

北台頂から眺める東台、中台、西台の遠景は、後日の貫首の感想として「五臺の内一番印象深い場所」と。

一一時〇五分

北台頂発

途中、故障車が動くまでの間、貫首は近くの岩場を歩かれる。

「古代より存在したと思われる石道」を見つけられる。慈覚大師が御歩きになられた道かもしれないと感慨一入のご様子。

一三時五〇分

賓館発

中台に向かう途中、羊の群れが多く、野うさぎも。

\*ボンネットを開け、ラジエターに水をかける。遠く眼下に竹林寺が眺める。途中、吉祥寺という寺院あり。

一五時 五分

中台頂着。標高二、八九〇m。

演教寺 儒童文殊菩薩を参拝

中台文殊殿の前に唐代の塔(約5m)あり。

北台、西台よく見える。

\*中尊寺の文殊菩薩の足下に納めるため、中台で小石を二、三個採取される。

一五時三〇分

中台発 峰道を西台に向かう。

一五時五五分

西台頂着 標高二、七七三m。

法雲寺 師子吼文殊菩薩を参拝。

「零陵香」という薬草を売っている。血圧に効くとのこと。

一六時一五分

西台出發 南台へ向かう。

とにかく、凸凹の自然道で貫首も随員もジープのロールバーに延べ十時間ほどつかまって移動した。

一七時一〇分

ようやく舗装道路に出る。

一七時二〇分

山門まで戻る。ここから南台入口になる。

貫首ここで五臺山の鳥瞰図を求められる。南台へ向かう途中、道がわかれ、右が「靈境寺」入口、左が「南台」となる。

\*靈境寺は『巡礼行記』に記されている靈仙和尚の遺跡であり、貫首も参拝したいご意向であったが、時間の都合上、断念された。

一七時四五分

南台駐車場着。十分程歩いて、南台頂着。標高二、四七四m。

普濟寺 知恵文殊菩薩を参拝。

因みに、五臺山の諸寺院は「五臺山仏教教会」が管理しているとのこと。貫首、明るい内に五臺全て巡拝することができて安心されたご様子。

一八時一五分

南台出發

一九時〇五分

賓館に無事着

車の一日の走行距離数は約二五〇kmに及ぶ。

ジープの貸切料は、八〇〇元(約一、〇〇〇円)

一九時三〇分

夕食 鄧氏と懇親を深める。



南台頂付近



中台より西台への道



北台頂石塔

七月二十四日(土) 快晴

八時三〇分 出発

途中、台懷鎮の街を流れる「清水河」という河の流れを見ながら移動。

八時四〇分 黛螺頂入口着

ロープウェイで約八〇〇mほど登ると、入口に「廣結善縁」の文字。

九時 五分 頂上着 五方文殊殿にて心経一巻をあげる。境内に乾隆帝の石碑あり。

一〇時四〇分 普化寺着

一一時一〇分 友誼賓館着

昼前に花火の音が響く。明日より五臺県の文化祭が開催される由。

一二時 昼食

\*昼食後随員、国際電話にて中尊寺に中間報告を行う。

一三時 五分 竹林寺着

慈覚大師はこの寺院で具足戒を受けられた。

この寺院は何度も破壊され、度々復興されている。現存の仏舍利塔は

明代のもの。その前に至り、総礼三宝、舍利礼文、円頓章、甲念仏、

後唄を唱える。

一三時四〇分 竹林寺発

金閣寺着 本尊千手観音。高さ一七m。脇侍 妙庄王夫婦。

一四時 \*中国の伝説に依ると、観音菩薩は妙庄王夫婦の三人目の子供である

といわれている。

慈覚大師は、この寺で金銀交書一切経を閲覧されている。

\*この寺院の石段は一〇八段あって、貫首には段下で遙拝していただ

くようお勧めしたが「寺院参観の最後なので」と言われ、ご自身で

石段を登られる。大雄宝殿にて読経される。

一四時二〇分 金閣寺発 五臺県に別れ一路太原へ。

一八時二五分 国旅大厦ホテル着

夕食。(山西料理)

\*夕食後に今回、山西省内の案内業務を担当していただいた山西省中

国際旅行社外連部長黄玉雄氏の訪問を受ける。

一九時五〇分 山西大酒店着

七月二十五日(日) 快晴

六時四五分 太原空港着 山西省人民政府専用車運転手孟氏と別れを告げる。

七時二〇分 搭乗 MU七二〇一便。鄧さんも同乗。

八時五五分 北京首都空港着、外は三八度。

一五時五五分 北京首都空港を発つ(NH九〇六)

(以下、日本時間)

七月二十六日(月) 晴

一四時三〇分 無事に中尊寺帰山

一八時 一山協議会 席上、貫首より、無事帰山の旨一山にご報告される。



金閣寺



竹林寺参道

# 中国房山石経回蔵

／ルポルタージュ

菅原 光中

北京の西南七十五キロメートルの地に房山雲居寺（唐代建築）がある。隋代（六〇五年）より、唐・遼・金に至る約一千年のあいだ刻字し続けられた石経一四、二七八枚の一切経が、そこに蔵されている。これは、北周武帝（五七四年）の廃仏によって末法到来を意識した仏教徒が、釈迦の教えを永久に伝えんがための聖業であった。

房山々頂近く、雷音洞の貞観二年（六二八）の刻記に、

正法・像法、凡そ千五百余歳なり。貞観二年迄既に末法に浸りて七十五歳なり。

未来に仏教廃毀する時、この石経を出して世に流通せしむ。

とある。

中国政府は石経を風化から保存するために、雲居寺境内に地下収蔵室を建設し、建国五十年に当たる本年、一九九九年九月九日九時を期して、全ての石経をそこに回蔵する儀式を催行した。仏法を不滅たらしめようとの悲願をこめたこの度の盛典はまさに千載一遇の機と思ひ、鎌田茂雄東大名誉教授の統導で七名と共にこれに参列することができた。

式は、中国仏教会副会長浄慧法師（師は、平成八年に中尊寺に参拝されている）の導師により、中・日仏教寺院九十九カ寺の式衆と政府要人や浄財寄進者など、約一万人を越す参列者で大変賑わった。

前日、我々一行は雷音洞（九洞の中心）に、樹木を掻き分けて参拝したのだが、洞

守の僧の話では「この石経は三百二十人が、一人一日に二文字ずつ千年のあいだ刻み続けたのだ」と、昔から伝え聞いているという。

中国の、そして敦煌石窟にも比肩されるこの石経山の在ることによって、まさに仏法そのものの永遠なることを、この身に実感しつゝ帰国した次第です。

妙法蓮華経譬喻品第三  
尔時舍利弗踊躍歡  
喜即起合掌瞻仰尊顏而  
白佛言今從世尊聞此法  
音心懷踊躍得未曾有所  
以者何我昔從佛聞如

〔論文〕

- (1) 「岩手県平泉町中尊寺出土の銭貨」  
『銭貨研究』第11号 平泉町文化財センター 及川 司
- (2) 「平泉・無量光院跡再考」——近年の調査成果から——  
『岩手考古学』第11号 平泉町文化財センター 八重樫忠郎
- (3) 「平泉への道・平泉の道」  
『中世のみちと物流』(山川出版社) 平泉町文化財センター 八重樫忠郎
- (4) 「平泉遺跡群の墨書のある中国産磁器について」  
『紀要 X X』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 柴田直人
- (5) 「天治三年『中尊寺供養願文』の伽藍比定をめぐって」  
『日本史研究』四四五号 中尊寺 菅野成寛

〔報告書〕

- (平成八・九・十年) 度科学研究費補助金研究成果報告  
・ 「中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の  
美術工芸品に関する総合的調査研究」

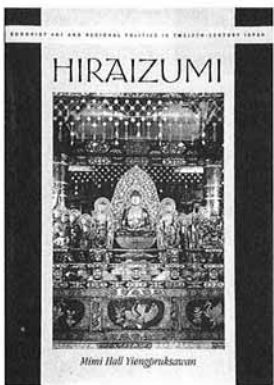
代表者 東北大学文学部教授 有賀祥隆

〔出版〕

- ・ 『平泉の世紀』古代と中世の間 (NHKブックス) 高橋富雄
- ・ 『HIRAIZUMI』  
— BUDDHIST ART AND REGIONAL POLITICS IN TWELFTH-CENTURY JAPAN —  
ハーバード大学アジアセンター MIMI HALL  
YIENGRUKSAWAN  
(Yale大学教授)



無量光院の東門と宝樹



〈こだわりま専科〉

風信 / 語録

モノの、形と用途にこだわりながら、自分の位置と方向を模索し、東京から平泉にもどって工芸店を開いた女性がいる。

「こだわり、ですか？」

あんなに欲しくて買ったのに、今はさっぱり使っていないモノって、どこの家庭にもあるでしょう。それらを見ると、そのモノが、もともと力の無いものだったり、作り手が技巧に走って、使うひとのことを考えていないモノだったりするわけです。器は、使われてこそ生きるものでしょう。

モノを作るって、歴史とか生活習慣など、いろいろなことがらを読みとって形に還元していくことじゃないでしょうか。形に、刷り込んでいくことだと思えます。

この浄法寺塗も伝統が形になっている。木地も無論地物、塗りの工程もずうっと見てきました。この、木の皮細工はネ、衣川村の九十歳になる方が、山ブドウとくるみの皮で、素材の癖をよく知ってるから、こういう質感にあってた形・意匠に…モダンで使い易い。「これまで東京の方でやってた仕事と、どうなの？」



造園設計の会社に勤めてました。造園設計のプロの人たちと正面から向き合って、真の言葉に触れてきたように思っています。職種は違っても作り手の姿勢が見えてくる。

岩手に帰ってきたのは、故郷だからというだけでなく、岩手にいいモノがあるからです。書物で調べ、出かけて行ってモノを見て、それから、作り手に会う。生業として作ったものかどうか…。

遊び心もモノづくりには大切ですが、取りつくるって作ったモノは、やはり、まがいのものですよネ。いい作家の、いいモノを探して仕入れを交渉、素材や技能をどう展開していくかが仕事…と語る。

工芸店「せき宮」 ☎ 46-2070

祝電 宮慶一郎

「中尊寺ハス」見事に開かれたとお知らせ、御仏様の御加護と一山の方々のご慈愛の賜物です。

今日、松島の『寒雷』大会で、諸氏にも伝えました。

心から、お喜び申しあげます。

「間伐」

新たに「讚衡藏」を立派に建てられたそうですが、それを伺って思い出しますことは、今の讚衡藏を建てるときの、御一山の大変なご苦労ですよ、もう四十年以上も前になりますか：

あの当時は、こう言っては失礼になるか知らんが、御山に財源が無かったですね。国庫補助と言っても、県だってやり繰り大変なこ

ろです。そこに、地元平泉町も財政窮乏としてました。管理者の中尊寺が地元町の負担の分まで出さなければ、国庫補助が下りない。ところが、当の中尊寺も、昭和二十五年の御遺体調査で有名になったと言ったって、まだ、今のよう

ですが、それが出せない。今じゃ考えられないでしょうけれども。しかし、当時は、戦後の復興に天皇陛下みずから全国にお出かけなられて御手植えなさった時期で、挙げて緑を増やそう、というときに、戦禍を免れた境内の木を何百石も伐れるわけないですよ。許すわけにはいかないのです。

金だっけそうそう意のままにはならず、手もと不如意どころの話じゃなかったみたいですね。

が、それでは文化国家を標榜しながら法隆寺のように、国宝に万一のことがあってもいいのか、と話し合い毎晩のように続けました。

それで、唯一、頼みの財源というのが杉立木を伐採し売却して、という一山の計画だった。

わたしも思案しまして、「間伐」ということであれば、林業普及の立場からも可とされますが」と、

わたし、その当時、一関の農林事務所の、岩手県林業改良普及員としてまして、それでご相談いただいたわけですよ。中尊寺の負担金が、確か、七十万円だったと記憶して

そう教えてさしあげたのでした。まさに、隔世の感があります。一関市赤荻 菊地助太郎（談）

江戸時代、寛永（一六四三）のころ、羽後尾勝郡八幡村（秋田県湯沢市）から須川岳を越えて、僧形が一人月見坂を登った。まだ雛僧である。少し前屈みに歩く姿に、不遇な生い立ちと利発な気性を感じられた。

中尊寺には、一切経五千三百巻があるということだったが、経蔵に入ってみると、紺紙金銀字の経は六巻しか残っていなかった。

「太閤様のように京に持ち出され、そのまま返したまわず」と、堂守の話聞いて、天下人の勝手な所業に悲憤をおぼえた。自分がここに参じたのも仏縁と、一切経を探し求め還納することを、彼は心中誓ったのである。

雛僧の法名は道寛、後に了翁と

称した。上州（群馬県）世良田の長楽寺で台密を修し、また禅林に修行、黄檗宗の隠元禪師に師事して碎指・断根の苦行を積んだが、それがまた薬方にも通じる契機になったらしい。

江戸に出て、自ら調剤した霊薬

「錦袋門」が庶人にうけ、そこで上野の池ノ端に薬舗を開き、巨額の利益を得ることになった。その財で書物を購入して、仏書・漢籍

時代の秋田にいた。不安・不透明な今の時代こそ了翁禪師の精神を見直してみる時機では」と、錦袋門を元に常備食「錦袋翁」を復元した（傳伝承堂の社長・野々村晴美さんは語る。地元で、あらためて顕彰の動きも出てきた。

（川瀬信雄著『了翁禪師伝』参照。近況は「中外日報」にも）

三万余巻を蔵し、講堂を建て勸学寮を創立した。そのみではない。一生のあいだに諸宗諸山に一切経（大藏経）二十一蔵を寄贈。また、江戸の大火には寒中に罹災者を支援するなど利他の行を尽くされた。

「自分を捨てて世のために尽くした了翁さんのような方が、江戸





(佐々木高門 佐々木賢有 編集・邦世)

ははきぎ  
帚木と老僧

(邦) 明治四十二年の夏、美術史家の黒田鵬心が中尊寺を探訪してまして、著書『古社寺行脚』に「平泉の七日」という章があって、

本堂は今再建の木材を集めていた所であった。関氏の斡旋で真珠院菅野澄湛氏方に行季を解いた。余に与えられた室は、広くして天井高く、庭に清い蓮があり、椽に立つと樹間北上河の一端と東稲山が見える。

去夏、洛北大徳寺の方丈に、遠州が意匠の庭の上に叡山を望んだ事も思い出され、意外の清寓を得た事を喜んだ。又澄湛氏の息澄澄君は東京天台宗中学に在学中だが、宛も暑中休暇帰省



中なので夜快談した。

と書いてます。真珠院さんの閑静な佇まい、そして澄教師の若き日のひとコマを垣間見るような。ずわれわれの記憶にあるのは、うっと後年の、「大林坊さん」とお呼びしてたご老僧の姿だけです。経歴やなにかも、『僧籍簿』に記載されていることしかわかりませんし、寺においてもあまり強く印象に残るような話は聞かないですね。たとえば、一山に賛否両論

のあるときに断固頑張ったとか、そのようなことはなかったみたいですよ。お人柄でしょう、いつも、冷めて(醒めて)いらしたようなと言ったら失礼になるでしょうか。

(賢) 大体において、そういう面倒な立場に立たされるようなことは引受けられない方で、思い出すのは、四十年前になるが今の讃衡蔵を建てたころ山内の要所々に火災報知器を設置したわけですよ。そしたら、あんなのは大人の玩具だって。いいとか悪いとか以前の話ですよ。

(邦) 「当節の人は……」って仰るの口癖でした。現在の事務所をご覧になったら、さぞ……。それこそパソコン玩具に夢中になって。筆も硯も忘れて、塔婆も

機械で書くのすか、とか言われそうですね。

実際、当時の『日誌』は筆でしかも一年毎に要件をまとめて別冊清書しておられます。だから読み易いし、資料としても貴重です。

(高) 戦後間もなく、中尊寺の代務者に、そして昭和三十四年には此処の宗務所長になっていただいています。

(賢) あの所長になってもらったときも、事務局で一切やります面倒は欠けませんって言って、なんとかお願いしたんだ。あの頃は拝観者も稀で、出勤はしても煙草でも吸ってるしかなかった。

(高) 煙草「光」のね、夕方近くなると、あの大黒帽被さばってよく、町に買いに下りられた。

決まった時間に、決まった店で、決まった格好でね。

(邦) 別所さん(次号掲載)と、いつもご老僧二人で火鉢を囲んでおられましたね。毎日、何を話されていたんでしょうか？

(賢) さあ、わからんね。

(高) わたしは御神事能の太鼓をご教授いただきました。お願いしたことがあります。しかし、ご自身が正式に手数習ったのではないからって、断られたたが、後日、大体のところではあれば来てもいいと言われて、それで太鼓も打つようになったわけですよ。

後継の澄覚師は学校の先生してたので、稽古をさせなかった。

(邦) 澄教さんの先代、澄湛師の代までは、中尊寺能の仕手方、

師家の一院で沢山門弟を抱えて教えておられたんですね。真珠院の推薦として神事能の舞台に地謡を勤めさせていました。ですから、黒田鵬心が滞在した室は、そのような間で、夏の時はあいていたわけです。

あの、真珠院さんの東椽から東稲山がみえたんですね、当時は。鵬心は、東稲山を「決して関東によく見る類の山でない。東京の北一百余里、忽然として京の山水に接する様な感じがした」とも書いています。東稲を遠く望みつつ、真珠院の庭にはいつも箒目が……。

『俳壇』九月号に進藤紫氏の  
帚木と老僧同じ影をもつ

という句がありました。この写真も雰囲気があって、いいですね。

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

□平成十一年

二月二十三日・二十四日

布教師研修会 二十八名 於武蔵坊

講演「駐在布教を中心とした布教について」

講師 乗実院住職 真嶋康祐師

四月十四日

布教師総会 二十六名 於毛越寺

五月三十日

サンガラトナ法天マケナ師講演会 百名 於毛越寺

「インドの社会事業と一隅を照らす」

―慈悲の灯を世界に―

\* 「一隅を照らす運動」陸奥地方本部よりサンガラト

ナの孤児院事業に支援金百万円を贈る。

六月十六日

保護司・民生児童合同研修会

佐々木秀円出席 於神戸市舞子

九月十九日



逸見晴恵氏



サンガラトナ法天マケナ師

一隅を照らす運動三十周年記念岩手福祉大会

六百名 於平泉文化史館

法話 中尊寺貫首 千田孝信大僧正

『いのち・こころ・ほとけ』

講演 逸見晴恵氏

『人生なるようにしかならない』

十月一日

臨時教区会・「一隅を照らす運動」理事会

於中尊寺

□ 役職任免

天台宗布教師任命(四月一日)

中尊寺	千田孝信	真珠院	菅野澄順
大長寿院	菅原光中	地藏院	佐々木秀円
積善院	佐々木仁秀	円乗院	佐々木邦世
千養寺	菅野康純	金剛院	破石澄元
积尊院	菅野成寛	自性院	北嶺澄照
長楽寺	佐々木慎宥	観音院	清水広元
円教院	千葉快俊		

陸奥教区地方選挙管理委員会委員任命

(七月二十八日〜平成十五年七月二十七日)

願成就院 三浦高信

陸奥教区地方選挙予備委員任命

円乗院 佐々木邦世  
自性院 北嶺澄照

陸奥教区宗務所

(十月一日〜平成十五年九月三十日)

所長 大長寿院 菅原光中  
 副所長 真珠院 菅野澄順  
 庶務主任 積善院 佐々木仁秀  
 財務主任 長楽寺 佐々木慎宥  
 教務主任 積尊院 菅野成寛  
 社会主任 金剛院 破石澄元

陸奥教区寺院問題委員

地藏院 佐々木秀円

陸奥教区所得調査委員

法泉院 三浦春興

陸奥教区名誉住職推薦委員

葉樹王院 北嶺澄仁

陸奥教区布教養成所

所長 中尊寺 千田孝信  
 主事 真珠院 菅野澄順  
 事務局長 円乘院 佐々木邦世

一隅を照らす運動陸奥地方本部

本部長 大長寿院 菅原光中  
 理事 真珠院 菅野澄順

(副会長)

利生院寺婦 菅野レイ子  
 大徳院 佐々木賢宥  
 地藏院 佐々木秀円  
 円乘院 佐々木邦世  
 積善院 佐々木仁秀  
 事務局次長 長楽寺 佐々木慎宥  
 事務局員 金剛院 破石澄元  
 積尊院 菅野成寛

教師補任 (四月二十一日)

僧正 大長寿院 菅原光中

敬弔

(平成十一年一月二十九日) 利生院寺婦 菅野円子 七十七才  
 (平成十一年六月二十一日) 瑠璃光院住職 権大僧正

住職任命・解任

解任 (六月二十一日) 菅野最純  
 任命 (七月二十二日) 菅野最純

瑠璃光院住職 菅野康純  
 千養寺兼務住職 菅野康純  
 宝性寺兼務住職 佐々木仁秀

経歴行階履修

入壇灌頂 積善院法嗣 佐々木律秀 九月九日  
 地蔵院法嗣 佐々木秀史 九月十三日  
 円頓授戒 積善院法嗣 佐々木律秀 九月十七日  
 法華大会 積善院法嗣 佐々木律秀 十月四日

地震災害義援金

\*トルコ地震災害義援金 拾萬円 中尊寺  
 \*トルコ地震被災者救援募金 二拾四萬七千円 中尊寺  
 \*台湾地震災害義援金 拾萬円 中尊寺

(八月三十日〜九月三十日)

\*台湾地震被災者救援募金

二拾七萬円 中尊寺  
 二拾七萬円 中尊寺  
 (十月一日〜三十一日)



# 執務日誌抄

平成十年十一月～十一年十月十日

平成十年

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。

郷土芸能、赤伏神楽・胆沢町都鳥鹿踊奉演。

平泉町交通指導隊三十周年記念式典(総務慎有 於日武蔵坊)

明治天皇曾孫朝香誠彦氏夫妻来山(執事長案内)。

二日 菊供養会

お経を読む会(貫首)

栃木教区明静寺様七三名団参(貫首案内)。

十二日 岩手県観光総合研修会(事業部澄元、職員三名、於日花巻温泉)

貫首、一関市にて講話(一関地方振興局研修会、於合同庁舎)

十三日 執事長・管財澄元、仙台市博物館へ出張(経蔵文殊菩薩像寄託打合わせ)。

十四日 天台宗全国一斉托鉢(弘前市)・教区研修会(～十五日、一隅を照らす運動、七名参加。於同市報恩寺)

十五日 貫首、江刺市にて講話(田原地区民俗文化講演会 於農業者健康増進センター)

十六日 佛教文化学会(～十九日、仏文研澄元)

職員研修旅行(～十七日、東京方面)

十七日 平泉町民号(～十九日、奈良・淡路島方面 仏文研邦世)

郷土芸能、胆沢町柳田念仏剣舞奉演。

高野山霊宝館主任学芸員井筒信隆氏来山(管財澄元)。

日光市小西美術社長小西陳雄氏夫妻来山(貫首応接)。

三日 能「枕慈童」狂言「附子」仕舞(地元・小桜会)

郷土芸能、長部鹿踊り・達谷毘沙門子供神楽・衣川村川西念仏剣舞奉演。

菊まつりモデル撮影会

平泉町町功労者表彰式(執事長 於役場)

管財澄元、県立博物館へ出張(高野山井筒氏講演会聴講)。

四日 貫首、栃木県那須郡塩原町にて講話(関東・甲信越国立幼稚園長研究協議会栃木大会 於日ニュー塩原)

東北広域連携観光振興会議(執事長 於盛岡グランドH)

東文研加藤寛氏来山(～十八夜調査)。

十九日 金色堂説明北京語放送開始。執事長・管財澄元、京都市面へ出張(～二十一日、新讚衛蔵内装材料見分)。

二十日 平泉商工会青年部三十周年、婦人部二十周年記念式典(参務澄順 於平泉レスト)

二十一日 仏文研邦世、一関市民大学歴史講座で講話(「東北の中の中尊寺」 於一関文化センター)

岐阜県立博物館秋期特別展「能面へのいざない」に出陳した翁・若女・老女計三面返却受領。

二十三日 天台会御速夜(結衆勤 本堂)

衣関小学校跡地石碑除幕式(執事長ほか 於平泉レスト)

二十四日 天台会厳修(御影供 本堂)

二十六日 「岩手の仏画展」見学(貫首・仏文研邦世・管財部康純 於

五日 一関市麻生高校生、境内清掃奉仕。

文化庁記念物課主任調査官境宗孝氏大池跡視察のため来山。

六日 貫首、千葉県成田市にて講話(北総教区檀信徒一隅大会 於成田国際文化会館)

七日 平泉町産業文化祭開会式・表彰式(執事長 於役場)

八日 菊まつり表彰式(大広間) 貫首、「外交の窓inn一関」(岩手県国際交流協会)にゲスト出演(於ベリーノH)。

一関喜桜会「謡と仕舞の会」(役員澄照 於一関文化センター)

九日 平泉町議会議員海外研修報告会(執事長 於毛越寺レスト)

十日 如法写経十種供養会(七〇名出仕 本堂)

十一日 貫首、一関市にて講話(岩手県公立小中学校事務研究大会 於一関文化センター)

県立博物館。

国際超伝導学会講師ドイツ・A・ブリジンスキー氏夫妻来山(総務慎有案内)。

小岩金網盛岡営業所新築祝披露パーティ(貫首 於桑田会館)

新讚衛蔵付帯工事(下水管敷設工事)契約締結。

二十七日 平泉町観光協会企画宣伝会議(事業部澄照)

東博山本勉先生来山(平成館開館特別展出陳について調査)。

二十九日 一山會議

三十日 境内一斉清掃

寺報『関山』第五号発行

◇十二月 一日 月次大般若会(本堂)

大池跡発掘現場一山見学・説明会(埋文センター及川氏)

執事長、埼玉県伊奈町へ出張(漆芸蒔絵家田口善国氏弔問)。

- 三 日 一関市交通安全協会鈴木幸男氏  
総務庁長官表彰祝賀会（執  
事長 於幸生会館）  
黄金王国推進委体験観光部  
会（事業部澄照 於一関商工会議所）  
新讚衡蔵建設定例打合せ  
（～五日、鈴木嘉吉委員長来山）。
- 四 日 新讚衡蔵建設事務局会議  
大阪府泉佐野市立歴史館、  
いずみさの秋期特別展「絵  
図は語る」出陳資料「骨寺  
絵図」返却なる。
- 六 日 平泉町観光協会役員研修旅  
行（～八日、四国方面 事業部澄照）
- 七 日 薬師会（讚衡蔵）  
新讚衡蔵建設現場一山説明  
会
- 八 日 花巻温泉副社長本木正幸氏環  
境庁長官表彰祝賀会（総務

- 九 日 初詣警備会議（管財、西行苑）  
山内年末風景マスコミ取材。  
十日 国税庁佐伯保氏ほか二名来  
山（総務慎有案内）。
- 十一日 神奈川県箱根町湖尻地区建  
設協議会一三名来山（仏文  
研邦世案内）。
- 十二日 IBC制作部佐々木雄平氏来  
山（TBS大晦日中継打合わせ  
総務部広元対応）。
- 十三日 ノルウェー王国大使ヨン・ビヨ  
ルネビー氏御夫妻、ハーブ  
奏者三宅美子師来山（貫首挨拶）。
- 十四日 岩手医科大学石渡隆司先生ほ  
か九名来山（貫首挨拶）。
- 十五日 弥陀会（本堂）  
一山協議会
- 十六日 陸奥所長光中、宗務所長会  
議へ出張（於鬼怒川温泉）。

- 十七日 白山会（本堂）
- 十八日 境内諸堂仏像煤払い  
ふれあい歴史のさと事業推  
進委員会（執事長 於役場）
- 十九日 執事長、東京出張（琴錦園九  
州場所優勝祝賀会 於Hニユー  
オータニ）。
- 二十日 新讚衡蔵事務局会議（展示  
設計・契約について）  
喜多流職分会自主公演能  
（宗生師「鉢木」披露にて貫首・  
常任院高円・円乗院邦世・薬樹王  
院澄照出向。於喜多能楽堂）  
お経を読む会（大徳院賢有）
- 二十一日 一関市菅原茂氏運輸大臣表  
彰祝賀会（執事長 於一関D.P）  
東文研加藤寛氏・東博丸山土  
郎氏、金色堂保存環境調査  
のため来山。
- 二十二日 町観光商工課イベント調整  
懇（総務慎有 於役場）  
境内赤堂近辺危険木伐採

- 二十三日 新讚衡蔵展示工事打合せ会  
（～二十四日、鈴木嘉吉委員長ほ  
か。於東京）
- 二十四日 文殊会（経蔵）  
修正会準備（結衆勸）
- 二十五日 節分講中会議（於泉橋庵）  
建設省ウォーキングトレイ  
ル事業計画説明会（町建設課  
長・執事長・総務部・管財部・地  
権者ほか 於広間）
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十日 IBC岩手放送（TBS系）  
生中継リハーサル
- 三十一日 午前七時、TBS系にて歳末  
風景全国生中継。  
午後三時、一山総礼

- 二 日 修正会 釈迦供（本堂）  
結衆堂籠り（～七日、開山堂）  
九時半 正月祈禱護摩供（本堂）  
十時 修正会 薬師供（讚衡蔵）  
十四時 誦初め（庫裡広間）
- 三 日 九時半 正月祈禱護摩供（本堂）  
修正会 山王供（山王堂）  
十時半 二元三会 慈恵供（本堂）
- 四 日 修正会 薬師供（瑞璃光院）
- 五 日 修正会 文殊供（経蔵）  
大般若会（利生院弁財天堂）  
梵焼供（結衆勸、開山堂）
- 六 日 修正会 釈迦供・月山供  
（釈迦堂）  
町新年交賀会（執事長）  
結衆、本日より寒修行。（町  
内托鉢）
- 七 日 修正会 白山十一面供（本堂）  
大般若会（本堂）  
十四時 修正会 弥陀供（金  
色堂）  
春の祭礼神事能番組決定

- 八 日 「竹生島」「秀衡」  
修正会 薬師供（讚衡蔵）  
一字金輪仏・千手観音法衆  
修正会結願  
十三時 恒例「金盃披き」
- 十日 執事長・管財澄元、神奈川  
県秦野市命徳寺へ出張  
（前貫首御内室多田セイ様去四日  
御逝去につき弔問）
- 十一日 執事長、県庁ほか新年挨拶  
回り。
- 十四日 一関地区防火演習担当者打  
合せ（管財澄元・康純 於泉屋）  
慈覚会（御影供 本堂）  
お経を読む会（常住院高円）  
一関地区防火演習全体打合  
せ（執事長 毛越寺レスト）
- 十七日 貫首、町内戸河内にて講話  
（於戸河内コミュニティーセンター）
- 二十日 県観光連盟旅行エージェン  
ト招待事業意見交換会（総  
務慎有、於つなぎ温泉）

平成十一年

◇一月

- 一日 新年祈禱護摩供修行（本堂）  
六時 東山町「若水送り」着  
十時半 総礼

二十一日 前貫首多田厚隆大僧正七回  
忌法要（本堂）



二十二日 松井建設社長松井角平氏来山  
（貫首応接）

二十四日 一関地区防火演習（中尊寺特  
設消防隊出動）

二十五日 一山協議会

二十六日 文化財防火デー  
菊まつり写真コンテスト審  
査会

平泉町観光協議委員会  
（事業部澄照）

二十七日 花巻温泉発丑会（執事長出向）

二十九日 貫首、宇都宮市にて講話（栃  
木県新規採用教職員研修、栃木県

総合教育センター）

山内利生院寺族菅野円子様  
逝去。

◇二月

一日 月次大般若会（本堂）

文化観光施設等整備運営委  
員会（執事長 於役場）

二日 建設省ウォーキングトレイ  
ル事業説明会（町建設課来山）

三日 恒例大節分会。関取琴錦招  
く。歳男歳女二二六名・町  
内園児が豆を撒く。

寒修行満行。

五日 利生院寺族菅野円子様葬儀  
（本堂）

侍侍もかゝるは花も篠一に遊ワレハ  
サヤ

恩情の笑顔惜もく寒椿  
常々

森林フォーラム参加全国市

町村長四一名来山（総務慎有

新讚衡蔵建設事務局会議

建設省ウォーキングトレイ  
ル事業説明会（町建設課来山）

花巻温泉芸妓組合一行来山  
（参務高信法話）。

平泉町観光審議会（執事長  
於役場）

弘文研邦世、一関市にて講  
話（西磐井地区図書館協議会講演  
会 於一関文化センター）

陸奥教区布教師研修会（  
二十四日、講師貫首・眞嶋康祐師。

一山二一名出席 於日武蔵坊）

中尊寺門前会研修旅行（  
二十五日、日光方面、貫首ほか七  
名参加）

平泉町観光協会役員会総会  
（執事長ほか 於商工会館）

貫首、一関市にて講話（岩  
手日日新聞社文化賞記念講演、於  
ペリーノH）

新讚衡蔵現場一山説明会

法話。

貫首、栃木県鹿沼市にて講  
話（鹿沼市PTA指導者研修、於  
ハッピー会館）

円乘院邦世著『平泉中尊寺  
—金色堂と経の世界—』  
（吉川弘文館・歴史ライブラリー）

出版記念祝賀会（貫首ほか  
於日武蔵坊）

東文研保存科学部三浦貞俊氏  
金色堂保存環境（温湿度）調  
査のため来山。

国際興業社長小佐野正邦氏  
子息ほか来山（執事長挨拶）。

来県中の中国吉林省長春市  
スポーツ交流団来山（執事  
長挨拶）。

建設省ウォーキングトレイ  
ル事業説明会（町建設課来山）

建国記念の日奉祝会（執事  
長 於小島神社）

新讚衡蔵定例打合せ会（  
於小島神社）

◇三月

月次大般若会（本堂）  
一関地区消防組合消防査察  
に来山。

菊まつり協賛会役員会（広間  
）

午前月見坂参道杉強風で倒  
れる（義家店舗に少々被害あり）。

吾妻流家元吾妻徳彌氏来山（貫  
首挨拶、参務澄照順応接）。

サントリー美術館土谷氏来山  
（特別展「日本のガラス二〇〇〇  
年展」出陳依頼）。

ウォーキングトレイル事業  
説明会（町建設課来山）

平泉町観光案内所落成式  
（執事長）

中国水墨画家傅益瑤氏来山（貫  
首応接）。

山内利生院法事（本堂）  
弘文研邦世、一関市で講話  
（「中尊寺」執筆の周辺、一関ロー  
タリー、於サンルート）

- 十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂）  
 定例一山会議  
 建設省国際建設フォーラム  
 様一行来山（執事長案内）
- 二十日 利生院後任宏紹君、本日より事務局勤務（金色堂輪番付）。
- 二十一日 春彼岸会法要（法華三昧）  
 お経を読む会（利生院円融）
- 二十二日 宮澤賢治学会来山（仏文研邦世講話案内）
- 新讚衡藏建設定例打合せ会  
 （二十四日、鈴木嘉吉委員長）
- 二十三日 強風及び春雪にて境内に被害あり。
- 二十四日 開山会護摩供（開山堂）  
 新讚衡藏上棟式  
 （一山二五名出仕、鈴木嘉吉委員長ほか来賓及び工事関係者一〇〇名。於新讚衡藏丈六仏室）
- 町下水道工事説明会（管財部 於二区公民館）
- 二十五日 陸奥所長光中、宗務庁へ出

- 二十六日 張（宗務所長会議）  
 「北上川を活かした地域づくり検討委員会」（総務慎有 於ベリノH）  
 「源義経公東下り保存会」  
 平成十一年度総会（事業部澄照 於滝沢魚店）
- 二十七日 山内真珠院法事（自坊）  
 西行祭短歌大会実行委員会（総務部 於一関市 世嬬の一）
- 二十九日 N H K B S 「平成古寺巡礼」取材（三十日）  
 新讚衡藏付帯工事（下水管工事 検査）
- 三十日 テレビ岩手、早朝座禅取材（事業部澄照）  
 平泉町観光協会写真コンテンツ審査会（事業部澄照 於芭蕉館）
- ◇四月  
 一日 月次大般若会（本堂）  
 一山辞令交付

- 二日 山内釈尊院法事（本堂）
- 三日 貫首、御修法出仕のため本山へ出向（十一日）  
 陸奥仏教青年会総会（執事長 於泉橋庵）  
 山内北参道舗装工事（建設省ウオーキングトレイル事業）
- 八日 仏生会（本堂）  
 お経を読む会（地藏院秀門）  
 平泉町観光協会「東下り行列」主要役者発表会（事業部澄照 於平泉レスト）  
 秋田TV仙台支社長長嶋山秀昭氏来山。
- 九日 「東下り行列」警備打合せ会議（執事長・管財部・事業部・総務部）  
 管財澄元、東博へ出張（寄託品返却交渉のため）。
- 十日 神事能申し合わせ（大広間）  
 執事長、盛岡市へ出張（御遺体調査委員足沢三之介氏葬儀、

- 於盛岡グランドH）。
- 中尊寺新能役員会（役席広元 於芭蕉館）
- 十一日 陸奥所長光中、宗務庁へ出張（十二日、災害保障制度について）。
- 十三日 中尊寺総代会総会（貫首ほか一〇名出席 於平泉レスト）  
 「東下り行列」警備打合せ（町観光協会長ほか来山。執事長・管財部・事業部）
- 十四日 天台宗陸奥教区布教師総会（貫首ほか八名出席 於毛越寺）
- 十五日 「春の藤原まつり」交通警備会議（執事長・管財部・事業部 於西行苑）  
 事業部澄照、東京出張（黄金王国プレゼンテーション、於池袋メトロポリタンH）。
- 新讚衡藏定例打合せ会  
 （十六日、委員長および荒木氏）  
 日本荷花学会事務局長遠藤剛氏

- 十六日 来山（仏文研邦世・管財部康純応援）  
 一山協議会  
 弁慶力餅競技会保存会総会（執事長 於泉屋）
- 十八日 観音講（山内観音院）  
 恒例花まつり
- 十九日 菊まつり協賛会総会  
 天台宗東京教区勝野隆昭所長ほか一行一八名来山  
 （団参の下見貫首・執事長挨拶）。
- 貫首、一関市にて講話（二関地区法人会女性部会定時総会記念講演、於ベリノH）
- 平泉中学校一年生五〇名野鳥巣箱掛け（二〇個）
- 二十日 陸奥教区会、一隅理事会  
 通信記念日、当寺のこれまでの郵政事業への協力に対し、平泉郵便局より感謝状贈呈される。  
 地元衣関桜友会（二区老人会）清掃奉仕。

- 二十一日 古実式三番申し合わせ  
 仙台市博物館長濱田直嗣氏来山。
- 二十二日 J R 東日本盛岡支社長栗山大義氏来山（執事長応援）。  
 中日新聞阿部孝子氏来山（芭蕉・奥の細道取材 執事長応援）。
- 二十三日 町観光イ・ベント調整懇（総務慎有・事業部澄照 於役場）  
 春の藤原まつり担当者会議（事業部澄照 於八花）
- 泉文化課長伊藤学司氏、主任文化財主査佐々木勝氏来山（執事長応援）。
- 二十四日 山内円乗院法事（自坊）  
 友和会御神輿お披露目会（執事長 於泉橋庵）
- 二十六日 貫首・参務澄順、東京出張  
 「三関天台 心の旅」出版記念の集い 於Hニューオオタニ）。
- 「新讚衡藏開館記念特別展」出陳依頼のため敵島神社・高野山金剛峯寺・大阪

四天王寺へ管財澄元出張（二十八日）。

黄金王国推進委員会総会（事業部澄照 於一関市役所）

二十七日 貫首・澄順、故吾妻徳穂氏一周忌記念公演観覧（於歌舞伎座）。

玉山村芥民中学校七一名拝観（澄円法話）。

平泉商工会青年部通常総会（総務慎有 於毛越寺レスト）

二十八日 平泉菊花会総会（春興 於泉屋）  
西行祭講師河野裕子師歓迎会（総務慎有 於ペリーノH）

県保健福祉部長関山昌人氏・次長伊藤静夫氏・課長小原公平氏来山（執事長案内）。

二十九日 第二十回西行祭短歌大会（講師 河野裕子氏）

貫首賞「湧口の雪の溶け  
みる水飲み場寄りくる牛  
ら冬毛の匂ふ」初森テル

務快俊）

十一日 西磐井郡市仏教会総会（法務部長生 於一関市）

貫首、栃木県下都賀郡壬生町にて講話（県立壬生高等学校創立記念講演会）

十二日 陸奥所長光中、中国天台山へ出発（天台山華頂講寺再建落慶法要出任）。

総務慎有、東京出張（御遺体調査）記録映画保存の打合せ、於NHKサービスセンター）。

県文化財愛護協会総会（管財澄元出席 於県立博物館）

十三日 一関地区防災協会総会（管財部康純 於両警消防組合本部）

十四日 アラブ・グループ駐日大使夫妻来山（貫首挨拶、慎有案内）。

十六日 平山郁夫画伯来山、山内を

子（二戸町）  
神事能申し合わせ（能楽堂）

◇五月

一日 春の藤原まつり開幕  
法要、稚児行列、常の如し。  
胆沢町柳田念仏剣舞、奉演。

二日 開山護摩供（開山堂）  
東下り行列主要役者レセプション（総務慎有・事業部澄照 於日武藏坊）

三日 源義経公東下り行列（経公役・タレントの藤原竜也。人出十五万人と観光協会発表）  
いわき太鼓奉演。

四日 古実式三番  
神事能「竹生島」

五日 古実式三番  
神事能「秀衡」、

イワキ太鼓奉演。  
衣川村川西念仏剣舞奉演。

スケッチ（東日本放送取材）

十七日、貫首挨拶。  
特別委員会（第二回）協議

二十日 新讚衡蔵消防設備等検査に両警消防組合来山。

二十一日 平泉商工会通常総会（総務慎有 於商工会館）  
消火栓ボックス交換工事（法泉院・利生院・能楽殿）

二十二日 第九回（秋田・宮城・岩手選抜中学校）中尊寺杯、スケッチ  
ポール大会開会式（総務慎有 於平中体育館）

二十三日 青柳忌（於盛岡中央公民館）邦世出席、有馬朗人文相に表敬挨拶する。

二十四日 貫首、宇都宮市にて講話（栃木県立清陵高校創立記念式典）

県観光連盟通常総会（事業部澄照 於盛岡Hメトロポリタン）

みちのく小旅行事業視察報

狂言 「清水」  
江刺市角懸鹿躍、奉演。  
弁慶力餅競技大会表彰式（参務秀円 於滝沢魚店）

\* 五日間の観光客入り込み数は二十三人（平泉町観光協会発表）

六日 山王講（山王堂）  
春期松食い虫被害実地調査

七日 群馬県常住寺蘭実丞師ほか御檀徒来山、墓参。  
東日本放送備前島文夫氏ほか七名来山（平山郁夫先生招へいにつき打合せ）。

八日 「中尊寺ハス」植え付けに  
恵泉女学園長島時子氏来山。

貫首、本坊にて講話（栃木県田沼高校PTA一行七名来山、於広間）。

十日 寺院規程等検討特別委員会開催（第一回、執事長・委員長澄順・委員邦世・慎有・仁秀・澄照、事

告会（事業部澄照 於いづくし園）

新讚衡蔵展示設計打合せ会（鈴木委員長および荒木伸介氏、管財澄元 於東京）

二十五日 仏文研邦世、仙台市で講演（「中尊寺あれこれ秘話」、仙台経済懇話会、於東急H）

二十六日 貫首、一関警察署にて講話  
管財澄元、日光輪王寺・福島龍興寺へ出張（二十七日企画展示品出陳依頼）。

二十七日 陸奥教区寺庭婦人、岩手支部定例総会（執事長 大広間）  
町観光課長佐藤敏雄氏・町観光協会副会長千葉庄悦氏来山（明年の開山一一五〇年祭打合せ、執事長・事業部澄照・総務慎有）。

二十八日 前町教育長大内雅孝氏、叙勲祝賀会（貫首・執事長 於日武藏坊）

「開山一一五〇年祭」企画記者発表（執事長ほか 於広間）



「平泉をきれいにする会」  
総会並びに束稲山美化清掃  
(管財澄元)  
サントリー美術館土谷氏来山  
(特別展「日本のガラス二〇〇〇  
年展」に資料貸出す)。  
三十日 サンガラトナ法天マナケ師  
講演会(インドの社会事情と一  
隅を照らす)一山より九名出席。  
於毛越寺)  
\*サンガ師が取り組んでいる  
「パンニャ・メッタ子供  
の家」に、「一隅を照らす運  
動」陸奥本部より支援のた  
め一〇〇万円を贈呈する。  
三十一日 中国天台人民政府考察団  
民族宗教事務局副局長袁春輝氏  
一行八名来山(貫首挨拶・執  
事長案内)。  
サンガラトナ法天マナケ師  
来山(康純案内)。

◇六月  
一日 月次大般若会(本堂)  
二日 敵島神社様一行二三名来山  
(管財澄元案内)。  
三日 兵庫教区円明寺森田源真師ほか  
六名様来山(参務秀円応接)  
四日 伝教会(御影供 本堂)  
六日 中尊寺杯ソフトテニス競技  
大会開会式(執事長)  
源義経公東下り行列保存会  
研修旅行(〓七日、新潟方面  
参務秀円)  
七日 徳川美術館学芸部普及課長小池  
富雄氏来山(秋期特別展「螺鈿」  
出陳依頼・調査)。  
八日 管財澄元、多賀城市東北歴  
史博物館・松島瑞巖寺に出  
張(鈴木嘉吉先生視察随員)。  
新讀衡藏定例打合せ会(〓  
九日、鈴木嘉吉委員長)  
特別委員会(第三回)協議  
西磐井地区植樹祭(管財部康

純 於和山牧場)  
九日 敵島神社様一行二〇名来山  
(管財澄元案内)。  
毛越寺藤里明久執事長ほか  
二名来山(開山二一五〇年祭打  
合せ、執事長・事業部澄照)  
十日 地方新聞論説委員一行一七  
名来山(仏文研邦世案内)。  
県観光連盟教育旅行誘致宣  
伝部会設立総会(事業部澄照  
於つなぎ温泉)  
「一隅を照らす運動」陸奥  
本部理事会  
十一日 陸奥所長光中・社会主任澄元、  
陸奥教区寺院婦人総会へ出  
張(於仙台清浄光院)。  
仏文研邦世、胆沢町愛宕公  
民館歴史講座『吾妻鏡』を  
読む会に出講。  
十二日 貫首、二戸郡浄法寺町にて  
講話(浄法寺町カンオヘアカレッ  
ジ、於浄法寺文化会館)

金剛院澄元、「狂言を楽しむ  
会」に出席(於盛岡市民劇場)。  
平泉町長島八雲神社例祭  
陸奥所長光中・庶務主任仁秀、  
陸奥教区一部寺院会へ出張  
(於仙台清浄光院)。  
十三日 法華経一日頓写経会(一四  
二名参加)  
十四日 菊まつり小学生菊花出展打  
ち合わせ会(春興・快俊 於泉屋  
町イベント計画等調整懇  
(執事長・総務慎有・事業部澄照)  
「新讀衡藏開館記念特別  
展」出陳依頼のため四国善  
通寺・和歌山道成寺・高野  
山金剛峯寺・長谷寺・竹生  
島へ管財澄元出張(〓十七日)  
十五日 芭蕉祭俳句大会事務局会議  
(事業部澄照 於役場)  
「ふれあい歴史のさと事  
業」推進委員会(執事長 於  
役場)

十七日 陸奥所長光中、宗務所みち  
のく会に出張(〓十八日、於  
天童市)。  
十八日 弁慶力餅保存会研修会(執  
事長 於毛越寺レスト)  
福島県博学芸員小林めぐみ調  
査のため来寺(義経画像・翁  
面・若女面・梵鐘)。  
十九日 「仙台青葉能」(理事邦世。貫  
首出向・澄照随員)  
陸奥教区二部檀信徒会(所  
長光中・仁秀・慎有 於毛越寺)  
衆議院議員達増拓也氏・東洋  
三氏、中国政府外務省員同  
行来山(執事長案内)。  
澄円、山家学会に出席(於  
大正大学)。  
二十日 自在坊蓮光忌法要(本堂)  
消防協会一関地方支部連合  
演習(執事長 於観自在王院跡)  
二十一日 山内瑠璃光院住職最純師遷  
化。

二十三日 敵島神社様一行一九名来山  
(管財澄元案内)。  
春の藤原まつり担当者反省  
会・平泉夜祭打合せ会(事  
業部澄照 於役場)  
二十四日 花巻温泉佳松園落成祝賀会  
(貫首・総務慎有出席)  
二十五日 瑠璃光院最純師葬儀(本堂)。  
東北大学教授有賀祥隆・青山学  
院大学教授浅井和春両氏、前  
年来の「中尊寺関係美術工  
芸品調査」報告のため来寺。  
二十六日 平泉文化会議所主催、羽田  
澄子監督の映画と講演の会  
「住民が選択した町の福  
祉」(貫首ほか聴講。参加四〇〇  
名。於平泉文化史館)  
貫首、小岩金網(株)社員研修  
会にて講話(於衣川村。三〇名)  
二十七日 執事長、東京出張(「ふるさ  
と平泉会」総会)。  
毛越寺線街路事業第一工区

落成式（総務慎有）  
長島小学校三年生「ふるさと探訪」（那世案内）



二十八日 貫首、町内見性寺にて講話  
（西磐井郡市教会ウエーサカ式典）  
栃木県藤原町消防団二五名  
研修視察来山（管財澄元案内）。  
二十九日 栃木教区日光観音寺様一行

十五日 執事長、新讚衡藏勸募に花巻市へ出張。  
仏文研邦世、一関市で講演  
（全国アメニティ協議会「景観に聞く―自然と歴史と人生と―」）  
開山二一五〇年祭道展打合せ。  
十六日 総務部広元、仙台市へ出張  
日光中禅寺小暮道樹師来山。  
清衡公御月忌（胎曼供 本堂）  
十七日 東京都江東区富岡八幡宮神輿総代連合会第六部（三好三・四睦会、高橋富雄氏ほか一行四〇名来山（貫首挨拶、邦世対応）。  
「中尊寺ハス」二輪目開花（二号鉢）  
十八日 平泉水かけ神輿宵宮（執事長）  
東京都江東区長室橋昭江氏来山（貫首案内）。  
十九日 平泉総社神輿渡御（金色堂前にて貫首挨拶）  
県博大石氏峰薬師堂蔵伝鳥

四四名団参（貫首案内）。  
三十日 貫首、宗務庁へ出向（二階を照らす運動理事會）。

◇七月

一山協議會

一日 月次大般若會（本堂）  
香川県善通寺様一行団参（管財澄元案内）。  
二日 江刺市個人蔵金字経調査のため管財澄元出向。「中尊寺経」と認められる。（江刺教育委員会）  
三日 「中尊寺ハス」花芽一号鉢二個、二号鉢四個、三号鉢一個  
四日 陸奥教区檀信徒役員會（陸奥所長光中・庶務主任仁秀）  
五日 貫首、天台宗議會「新成會」に出席（六日、陸奥所長光中同行 於伊香保温泉）。  
管財澄元、仙台市博へ出張（開山二一五〇年祭企画展打合せ）。

二十日 天狗化石調査のため来寺。  
貫首、中国五台山へ出発（二十六日、参拜 随行宏紹）。  
総務慎有・事業部澄元、関西旅行エージェンツ回り（一五〇年祭宣伝、二十三日）。  
「中尊寺ハス」三輪目開花（二号鉢）  
二十一日 執事長・事業部澄照、仙台・東京出張（一五〇年祭宣伝旅行エージェンツ回り）。  
「中尊寺ハス」三輪目金色堂に献花。四輪目開花（二号鉢）  
二十二日 「中尊寺ハス」五輪目（二号鉢、六輪目（三号鉢）開花  
二十四日 町観光課による観光客動態調査実施（本堂表門）。  
「平泉ユネスコ協會」設立總會（執事長 於役場）  
二十五日 宮城県古川商業高校女子バレー部、インターハイ必勝

六日 平泉小学校六年生「ふるさと学習」（澄元講話）。

七日

新讚衡藏定例打合せ會

八日、鈴木嘉吉委員長来山  
九日 仏文研邦世、胆沢町愛宕公民館で『吾妻鏡』講義（善通寺様九名来山）。  
十日 JR東日本栃木「南三陸と中尊寺参拝の旅」団参（貫首講話）。  
「中尊寺ハス」開花（二号鉢）につき即日、恵泉女学園短大教授長島時子先生来山。  
十一日 如法写経十種供養會、頓写法華経奉納式（九二名出仕）。  
中尊寺ハス開花マスコミ取材  
十二日 執事長・事業部澄照、盛岡市出張（開山二一五〇年祭宣伝挨拶回り、県庁ほか）。  
十四日 黄金王国キャラバン反省會（事業部澄照、於一関市役所）

祈願（不動堂）。

\*二年連続優勝を果たす。



全国高校総合体育大会 2年連続優勝  
応援ありがとうございました

古川商業女子バレー部一同

二十六日 新讚衡藏建設現場一山視察  
「中尊寺ハス」七輪目開花（三号鉢）  
二十八日 境内ウォーキングトレイル事業説明會（舗装面・管理区域について）  
二十九日 大文字まつり警備會議（執事長 於西行苑）

◇八月

- 境内ウォーキングトレイル  
事業計画説明会(町建設課)
- 一日 月次大般若会(本堂)  
瑠璃光院前住最純師七七  
日・百箇日法要(本堂)
- 二日 二〇〇〇年平泉観光推進実  
行委員会(執事長・総務慎有・  
事業部澄照 於役場)
- 三日 事業部澄照、福岡市へ出張  
(五日、旅行エージェント回り)
- 四日 十五時半、へ平和の鐘」打鐘。  
貫首、日光市にて講話(日  
光立木観音)
- 境内ウォーキングトレイル  
事業計画説明会(町建設課)
- 五日 執事長・管財澄元、大阪(岡  
村製作所展示ケース見分)・京  
都(唐長唐紙選定)・高野山  
へ出張(「新讚衡蔵開館記念特別  
展」出陳依頼、七日、鈴木委員  
長に同行)。

- 七日 夏安居(結衆勤、開山堂)  
大韓民国商工会議所会長一  
行四六名来山(総務慎有案内)。
- 十日 梵焼供(結衆勤、常の如し)
- 十一日 大文字まつり打ち合わせ会  
(事業部澄照 於松田食堂)  
第六回新讚衡蔵建設委員会  
(工事経過及び報告・展示設計・  
外構工事について)委員長鈴木  
嘉吉氏・委員牛川喜幸氏・  
渡辺明義氏・宮野秋彦氏・  
文化庁美術工芸課大塚英明  
氏・記念物課磯村幸男氏・岩  
手県文化課課長補佐高橋信雄  
氏。(他に、荒木伸介氏、町教委  
菅原・本沢・及川氏も同席。寺側  
より執事長・澄照・邦世・澄元  
設計管理(株)三衡舎(勝部)、  
松井建設(株)東北支社(山本・  
石井)
- 十二日 総務部広元、仙台下張(二一  
五〇年祭書道展打合せ)。

- 十四日 「中尊寺ハス」十輪目開花  
(三号鉢)  
第二十三回中尊寺新能  
能 「頼政」(塩津哲生師)  
「鉄輪」(佐々木宗生師)  
狂言「三本の柱」(野村万作  
師・萬斎師)  
大分県知事平松守彦氏夫妻・  
県総務部長武居丈二氏夫妻来  
山、「新能」観能(貫首挨拶・  
執事長案内)。
- 十六日 第三十五回平泉大文字まつり  
(ただし、夕刻よりの濃霧に覆わ  
れて火影全く見えず。前例無きこ  
となり)。
- 十八日 総務慎有、盛岡出張(二一五  
〇年祭宣伝、マシエリ編集部・J  
ネット北東北営業所)。
- 二十日 毛越寺施餓鬼会(二老常住院  
高門参席)  
一関市観福寺施餓鬼会(三  
老大徳院賢有参席)

- 貫首、本山へ出向(戸津説法  
陪席 於阪本東南寺)。
- 新讚衡蔵建設工事のため山  
内一部上下水道断水
- 二十三日 大施餓鬼会御逮夜(本堂)
- 二十四日 大施餓鬼会(本堂)
- 二十五日 岩手県文化課次長ほか三名  
境内視察に来山。  
作家早乙女貢氏来山(貫首案  
内)。
- 全国消防長会組合消防委員  
会(北ブロック)、防災視察研  
修一行来山(執事長挨拶・管財  
部案内)。
- 県教育次長千葉弘氏、文化課  
小川明彦氏・佐藤嘉広氏来  
山(執事長・管財澄元応接)。

- 三十日 管財澄元、新讚衡蔵保存環  
境現況P・H調査実施
- 三十一日 町内龍玉寺大施餓鬼会(三  
老大徳院賢有参席)
- ◇九月
- 一日 月次大般若会(本堂)  
山形県瀬見温泉亀割観音例  
祭(二老常住院高門出向)
- 二日 泉観光連盟教育旅行部会  
(事業部澄照出席 於盛岡)。  
筑波大学教授吉岡正和氏、文  
部省外国人研究員シャロン・  
トラウイーク氏来山(執事  
長案内)。
- 三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)
- 四日 貫首、東北仏青総会で講話  
(於日武蔵坊)

- 六日 新讚衡蔵定例打合せ会  
(八日、鈴木委員長来山)  
岩手県経営者協会会長佐藤光氏  
来山(貫首講演会打ち合わせ)。  
埼玉信用金庫いきがいで大学  
一行第一班来山(十一月十  
七日まで、二八班 計三五〇名  
の予定)。
- 七日 大長寿院光中、中国房山石  
経視察に出発(十一日)。  
事業部澄元、北海道へ出張  
(十日、二一五〇年祭宣伝 旅  
行エージェント回り、教育旅行誘  
致説明会)。
- 管財澄元、静岡県清水市へ  
出張(九日、二一五〇年祭企画  
展出陳依頼 於鉄舟寺)。
- 東文研三浦定俊氏金色堂保  
存環境調査来山。
- 紫波町五郎沼薬師神社例祭  
(三老大徳院賢有出向)
- 貯水池清掃作業(管財部ほか)

二十七日

- 一山協議会  
社会を明るくする運動実施  
委員会(執事長出席 於役場)
- 仏文研邦世胆沢町出講(3)
- 宮城県栗駒町「義経公奥州

二十八日

- 宮城県栗駒町「義経公奥州

二十九日

- 山内地蔵院法事(本堂)

松井建設常務守屋克己氏・同東北支店長中村正明氏来山（貫首応接）。

十一日 公文研邦世胆沢町へ出講（4）朝日新聞東京本社編集局長三浦昭彦氏ほか四名来山（貫首応接）。

十二日 今春聴前貫首二十三回忌法要執行  
梵焼供初行（二十日 利生院 後住宏紹）

貫首、栃木県下都賀郡壬生町へ出向（圓宗寺名誉住職中里徳海師葬儀 随行澄円）。

十四日 町内八坂神社例祭  
十五日 東博開館特別展「祈りのかたち」出陳のため関伽堂葉師如来坐像抜魂法要、搬出（東北歴史博 小井川氏）

成会議（事業部澄照 於役場）  
二十六日 ワキ方高安流和泉昭太郎先生来山稽古。

二十七日 総務部広元、仙台市へ出張（二一五〇年祭書道展打合わせ）。

二十八日 陸奥所長光中、宗務庁へ出張（三十日、宗務所長会議）。

二十九日 東北大学柳原助教ほか来山。  
江刺開発振興常務佐藤雅士氏・江刺市企画調整課長千葉俊一氏来山（総務慎有応接）。

三十日 東博平成館開館記念特別展「金と銀」に金色堂内仏像（西南壇観音・地藏、西北壇持国・増長）四体、出陳のため抜魂法要、搬出（東博山本勉氏）。

建設省全国河川工事課長会議一行二七名来山（総務慎有案内）。

特別委員会（第四回）協議

紫波町蜂神社例祭（円教院快恩出向）

平泉町敬老会（執事長出席）  
酒田三十六人衆代参、根上弘喜氏ほか来山。

「いっくら国際文化交流会」一五名来山（貫首挨拶・春興案内）。

平泉「メビウスの会」境内の自然観察、雨中実施。

十七日 秋能「殺生石」シテ方稽古。文化財愛護協会仏画調査に澄元参加（十九日、軽米町）。

平泉小二年生参拝。

十八日 平泉小五年生PTA（親子レクリエーション）一行一五〇名拜観（総務慎有講話・案内）。

日光律院会様団参（三〇名貫首挨拶）。

◇十月

一日 月次大般若会（本堂）  
陸奥教区教区会、一隅を照らす運動理事会（大書院）

二日 慈眼会（本堂）  
三日 JTB東北営業副本部長馬場和彦氏・西山恒夫氏来山（執事長応接）。

四日 東京教区第六部様六八名団参（貫首挨拶）。

五日 東京教区第七部様八九名団参（貫首挨拶）。

六日 平泉町観光推進実行委員会幹事会（執事長・総務慎有・事業部澄照）

六日 東京教区第三部様五八名団参（貫首挨拶）。

松井建設常務白井隆氏・営業部小林章次氏来山（執事長応接）。

十九日 一隅を照らす運動岩手福祉大会（貫首法話「いのち ころも 仏」、ほかに講師逸見晴恵氏 参加六〇〇名、於平泉文化史館）

赤堂稲荷例祭（護摩供）

二十日 シャルロツテ・ド・ロスチヤイルド氏来山（貫首挨拶）。

埼玉県嵐山町大行院様・東京都八王子市澤井邦夫氏（前貫首高築亮宥師子孫）来山。

二十一日 騎師文殊菩薩及び四眷属多賀城東北歴史博物館にて検収、引き続き開館特別展「祈りのかたち」出陳。

須賀川市立博物館長横山大哲氏来山（公文研邦世応接）。

二十三日 秋彼岸会（法華三昧修行 本堂）  
お経を読む会（大長寿院光中）  
管財澄元、千葉県柏市へ出張（前文化庁美術工芸課長西川新次氏葬儀）。

二十四日 一一五〇年祭企画ガイド作

接。

七日 一関信用金庫五十周年記念式典（貫首・執事長 於ペリーノH）

八日 貫首、盛岡市にて講和（東北経営者大会 於盛岡グランドH）  
東北歴史博物館開館特別展のため諸仏安座法要（貫首・管財澄元、随行長生 於多賀城市）  
事業部澄円、盛岡出張（名古屋屋園観光誘致説明会出席）

九日 公文研邦世、大東町にて講演（大東町戦没者追悼式「いのちの季節」 於大原公民館）

九日 東北歴史博物館開館記念式典（貫首出席）  
陸奥所長光中・教区庶務仁秀、宮城県南方町興福寺へ出向。（教区法要の習礼のため）

## 中尊寺宝物館「讚衡蔵」建設 勸募趣意書

當山は、慈覚大師(円仁)の開山と伝え、みらのくに天台の法燈を高く掲げ、かつ大檀主藤原初代清衡公の志願に成る仏像や荘嚴、二代基衡公、三代秀衡公が所願の仏経等、平安美術の至宝と襲蔵してまいりました。

人の「信」というものが、「美」とともにあり、仏師が無常の思いをもって鑿を打ち造形した、そういう時代の彫像であり鑿の華であります。その質と量とにおいて、中尊寺が日本文化史上に突出した位置を占めておりますことは、周知のごとくであります。

一山のみならずこの地方の先人方が、世情混沌とした時代においてなお、藤原氏の偉業とその志の高さを讃仰し、當山の寺觀と遺宝と護るべく尽力されてこられた経緯が、歴史のなかに汲みとることができます。

現在の讚衡蔵は、三千余点に及ぶ山内の国宝・重要文化財を一所に收蔵して、まずは火災から護り、その真価を一般に認識いただくために全国で戦後初の国庫補助により建設されましたのが、昭和三十年であります。

しかし、すでに四十余年が経過して既施設の耐用も限界に至りました。管理の上からも影響が懸念され、また、指定文化財も相当に増加しており、今般、漸く新讚衡蔵の建設に踏み切った次第であります。

新讚衡蔵は、文化財の科学的保存は勿論のことながら、単なる展示施設でなく、諸尊仏を安置する仏堂たるを基調に、参拝者に四衡公の遺風に触れていただけ、金色堂に付属した堂として構想し、館名も「讚衡蔵」そのまま「藤原三代の偉業を讃仰」と報恩の素意を捧げるものであります。

貴台に、御助成の勸募をお願いし、もって讚衡の勝縁を結ばれますよう改めて勸進申し上げます。敬白

平成十一年錦秋

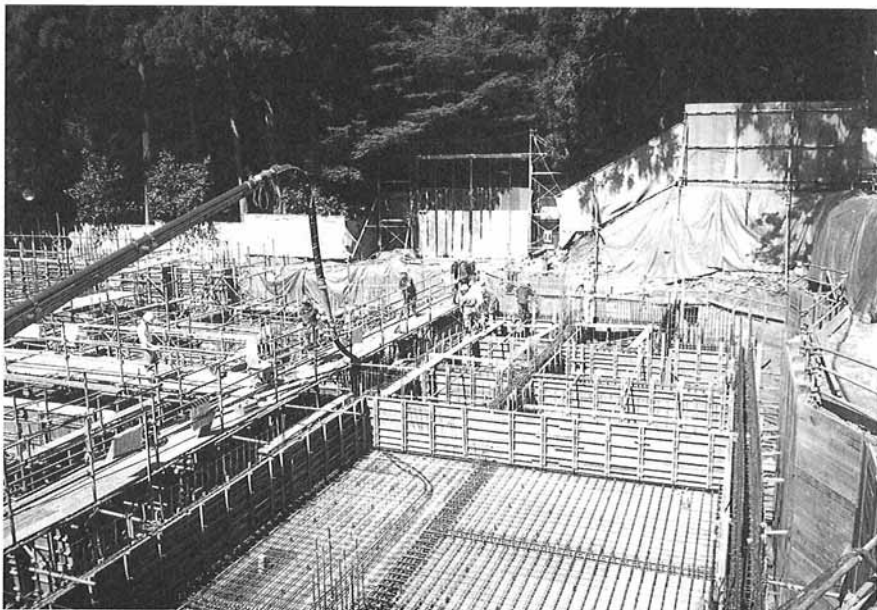
敬白

## 新讚衡蔵〔建設工事記録〕



平成十一年三月二十四日  
中尊寺新讚衡蔵(宝物館)新築工事 上棟式





平成十年六月 コンクリート工事  
地中梁コンクリート打設



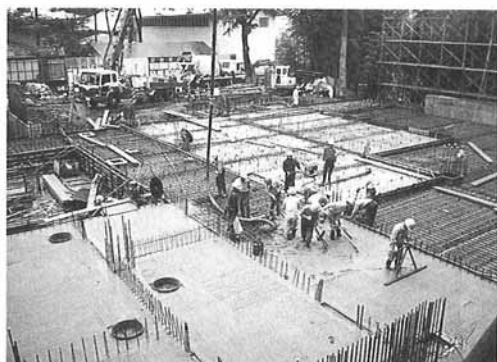
上棟の儀



棟札

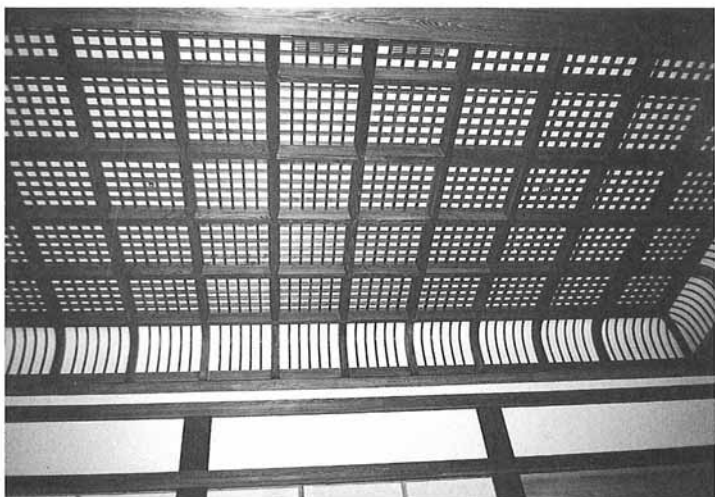


平成十年七月 土工事土間木織板敷込

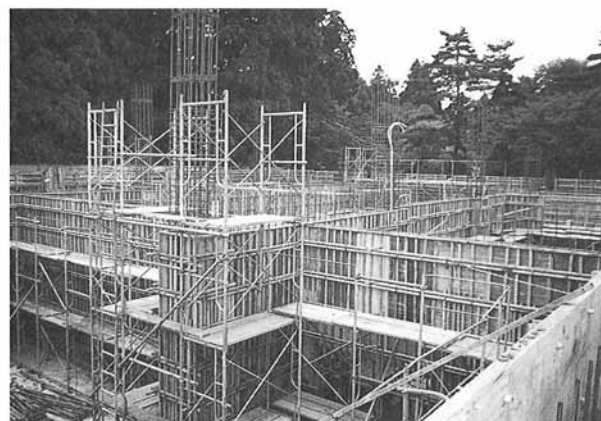


平成十年七月 コンクリート工事  
一階土間スラブコンクリート打設





平成十一年十月 木工事  
丈六仏(三休)安置壇上 天井見上げ



平成十年九月  
鉄筋型枠工事  
二階立上り躯体



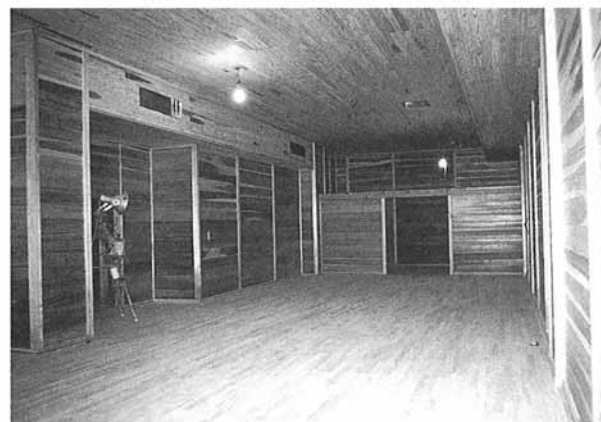
平成十一年十月 既製コンクリート工事  
肘木・斗組み



平成十年十二月  
コンクリート工事  
屋根スラブコンクリート打設



平成十一年十月 消火設備  
ハロン消火ポンベセット施工中



平成十一年四月 木工事  
第二収蔵庫施工状況

浄財御奉納者 御芳名

平成九年〔寺報〕前号記載追加)

十一月 宮城県 金野孝一・玲子様 五万円  
 盛岡市 川村和正様 五万円  
 大通寺 藤澤克悦様 五万円  
 藤澤 勝様 五万円  
 東京都 有職組紐道明様 七拾万円

平成十年

十一月 北日本銀行 ふるさと大学様 三万円  
 一関市 一関信用金庫様 七拾万円  
 今市市 明静寺様 七拾万円  
 同寺総代 湯澤正延様 三万円  
 群馬県 泉福寺様 三万円  
 十二月 泉佐野市 歴史館いずみさの様 六万円  
 平泉町 (有)平泉観光写真社様 七拾万円

平成十一年

一月 神奈川県 大聖院様 五万円



平成十一年十月 屋根正面より

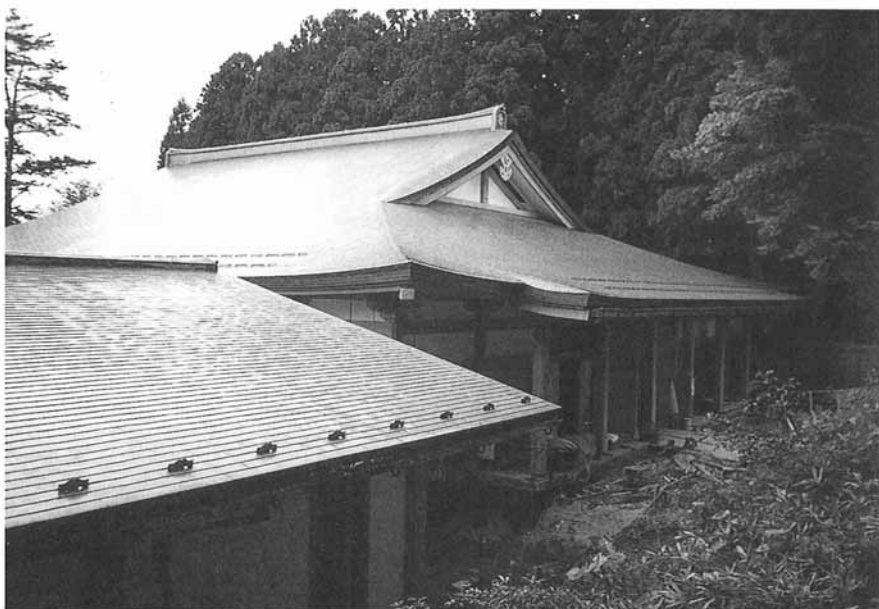
三月 東京都 佐々木昭一様 三万円  
 神奈川県 命徳寺・大聖院様 五万円  
 吾妻徳彌様 三万円

四月 平泉町 毛越寺様 三万円  
 平泉町 高橋東喜様 五万円  
 東京都 松林フジ枝様 三万円  
 天台宗 東京教区様 三万円  
 日光市 星野家・飯野家様 五万円  
 一関信用金庫 平泉支店様 三万円

五月 群馬県 常住寺蘭實丞 五万円  
 沙羅の会様 三万円

六月 近江八幡市 西川竹治郎様 三万円  
 平泉町 小岩金網株式会社様 七拾万円  
 日光市 観音寺 観音婦人講様 七拾万円  
 七月 日光市 中禅寺様 三万円  
 八月 浄土宗 岩手教区様 六万円  
 九月 日本エアーサービンス株式会社様 三万円  
 日光市 律院会様 五万円  
 日光市 興雲律院 中川光喜様 三万円  
 石巻市 東雲寺様 三万円

八王子市 澤井邦夫様 七拾万円



平成十一年十月 北東側より



不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成十年十一月～平成十一年九月

青森県 笠原山不動院代表  
小笠原喜世様

八拾参萬円

盛田悠三様

七萬円

北山 肇様

五萬円

笹 隆治様

四萬円

御供物

仙台市 伊藤清子様

六拾五萬円

清酒二五本

根田正昭様

貳拾六萬円

清酒三本

川熊武芳様

貳拾参萬円

清酒二本

衣川村 株式会社グリスター  
代表取締役千葉繁様

貳拾八萬円

一関市 川嶋印刷様

拾萬円

豊隆軌道(有)千葉幸八様

五萬円

精茶百年本舗様

五萬円

(有)丸卓建設様

四萬円

〈山平〉様

参萬円

一関中学校  
昭和四十八年度卒同級生様

九萬円

山目中学校三学年様

九萬円

平泉町 平泉中学校  
昭和四十八年度卒同級生様

八萬円

広島県 宇井政彦様

六萬円

宮城県 (有)金成工務店様

参萬円

北上市 高橋喜徳郎様

参萬円

東磐井郡 中川富也様

参萬円

福島県 里守屋講中様

七萬円

岩手県 (有)阿部礦産様

参萬円

米沢 励様

毎月御供物

青森県 工藤銀四郎様

毎月御供物

宮城県 藤枝恵枝子様

御供物

新讚衡蔵建設浄財寄進結縁 御芳名

一関市 一関信用金庫様

貳千萬円

平泉町 (有)平泉観光レストセンター様

五百萬円

貫首 千田孝信様

五百萬円

中尊寺一山各院様

壹千八百萬円

〈篤信家〉

五百萬円

〈篤信家〉

四百萬円

東京都 (有)小西美術工藝社様 〈漆塗り経箱〉

十個

平泉町 小岩金網様

参百萬円

川嶋印刷様

貳百萬円

京都市 (有)金聲堂様

壹百萬円

〈篤信家〉

壹百萬円

盛岡市 岩手銀行様

壹百萬円

平泉町 朝田建設様

壹百萬円

(有)平泉観光写真社様

壹百萬円

(有)西行苑様

七拾萬円

盛岡市 東北銀行様

五拾萬円

春日部市 (有)桜井様

五拾萬円

一関市 岩手南農業協同組合様

五拾萬円

平泉町 岩間 洗様

五拾萬円

(有)芭蕉館様

五拾萬円

一関市 石橋ホテルいづくし園様

参拾萬円

(有)佐々木食品工業様

参拾萬円

コンカツ印刷様

参拾萬円

松栄堂様

参拾萬円

宮城県 今野玲子様

参拾萬円

神奈川県 及川盛也様

参拾萬円

東京都 (有)オーテック様

参拾萬円

日光市 観音寺様

参拾萬円

平泉町 関口一雄様

参拾萬円

三浦道子様

参拾萬円

千葉庄悦様

貳拾萬円

福聚教会中尊寺支部様

貳拾萬円

(有)平泉ホテル武蔵坊

貳拾萬円

(有)銅盛鋳金工業様

貳拾萬円

(有)千葉製材所様

貳拾萬円

	(旬)泉橋庵様	貳拾萬円		青木 茂様	壹拾萬円
	平泉町観光ガイド事務所様	貳拾萬円		鈴木正人様	壹拾萬円
一関市	男山酒店様	貳拾萬円		千田果実店様	壹拾萬円
	菅勇生花店様	壹拾萬円		内田不二子様	壹拾萬円
	世嬉の一酒造(株)様	壹拾萬円		南館廣太郎様	壹拾萬円
	東海林 精之助様	壹拾萬円		(旬)平泉電力工業所様	壹拾萬円
	梁川 浩様	壹拾萬円		朋の会様	八萬円
	太平工業(株)システムイン一関様	壹拾萬円	仙台市	阿含宗東北本部様	五萬円
	山田 雪様	壹拾萬円	一関市	(旬)美研工房様	五萬円
久慈市	久慈琥珀(株)様	壹拾萬円		永泉寺様	五萬円
仙台市	東北カード(株)様	壹拾萬円		畠山瑞穂様	五萬円
前沢町	鈴木 男様	壹拾萬円	京都市	(株)ノバジャパン浪花屋様	五萬円
東京都	学校法人文化学園様	壹拾萬円	東京都	清和書道会様	五萬円
	濱野あぐり様	壹拾萬円		(株)翠雲堂様	五萬円
平泉町	(旬)丸庄様	壹拾萬円	平泉町	電源開発(株)様	五萬円
	(旬)泉商店様	壹拾萬円		(旬)三栄ビジネス様	五萬円
	(旬)せきひら物産店様	壹拾萬円		(旬)タイヤギャラリー車遊館様	五萬円
	(旬)ナンデモヤ商会様	壹拾萬円		小松代啓子様	五萬円
	関宮千代丸様	壹拾萬円		岩渕 汪様	五萬円
	千葉 清様	五萬円	平泉町	(株)衣関屋	参萬円
	千葉栄吾様	五萬円		(旬)翁知屋様	参萬円
平塚市	村上政彦様	四萬円		(旬)義家様	参萬円
一関市	(旬)古川ボンブ製作所様	参萬円		(旬)巖秀商会様	参萬円
	三浦妙子様	参萬円		芽吹き寿司様	参萬円
	七田芳弘様	参萬円		高粱様	参萬円
	蔵ホテル一関様	参萬円		得田和明様	参萬円
	中臣亮啓様	参萬円		弁慶園様	参萬円
	千葉春雄様	参萬円		星畳店様	参萬円
茅ヶ崎市	鈴木絢子様	参萬円		八百清様	参萬円
	鈴木教之様	参萬円		千葉 正様	参萬円
京都市	(株)安藤様	参萬円		松田 勝様	参萬円
犬山市	梅花堂様	参萬円	愛知県	茶谷きみえ様	貳萬円
盛岡市	(株)アール・ナック様	参萬円		茶谷昇様	貳萬円
仙台市	(旬)永大ギフト様	参萬円		茶谷和夫様	貳萬円
	佐藤元様	参萬円	衣川村	三浦六男様	貳萬円
	東日本放送(株)様	参萬円		菅原善市様	貳萬円
長岡市	手塚悦雄様	参萬円	一関市	前川茂様	貳萬円
東京都	鈴木友子様	参萬円		東北日本電気(株)様	貳萬円

盛岡市	朝田泰子様	貳万円	我孫子市	風間武治様	壹万円
前沢町	小野寺瑞夫様	貳万円	佐賀県	瀧光徳寺様	壹万円
東京都	大塚 博様	貳万円	佐野市	落合喜行様	壹万円
	田島章江様	貳万円		落合紀美子様	壹万円
平泉町	ストロングスポーツ様	貳万円	小金井市	荒井義郎様	壹万円
	葛西光男様	貳万円	上尾市	貫井歌雄様	壹万円
	葛西文治様	貳万円	新潟県	伊佐智祐様	壹万円
	岩渕光三郎様	貳万円	神奈川県	菅沼茂様	壹万円
	岩渕文雄様	貳万円	盛岡市	菊池秋光様	壹万円
	高橋幸夫様	貳万円	仙台市	佐々木みつ子様	壹万円
	佐々木文弥様	貳万円		陸羽道路メンテナンス(株)様	壹万円
	菅原良悦様	貳万円	川崎市	元田明宏様	壹万円
	千葉勇一様	貳万円		田邊源子様	壹万円
	川坂 浩様	貳万円	東京都	平賀ワカ子様	壹万円
	内藤謙蔵様	貳万円		大塚一彦様	壹万円
一関市	小島喜久子様	壹万円	富士見市	佐藤重光様	壹万円
	石川和也様	壹万円		佐藤和代様	壹万円
浦和市	友野孝重様	壹万円	平泉町	岩手トヨタ自動車(株)一関営業所様	壹万円
横浜市	平田富美子様	壹万円		曲水亭様	壹万円

〈朋〉様

〈参拜者〉菊地芳雄様 壹万円

〈参拜者〉太田 様 壹万円

中尊寺檀家一同様 貳百五拾九万円

中尊寺職員有志様 四拾七万円

(平成十一年十月十日現在)

## 中尊寺開山千百五十年祭 趣意書

当山は、慈覚大師円仁の開山と伝えられます。師は比叡山仏教の法門を形成し、宗祖最澄と共に、我が国における「大師号」宣下の初例で、日本仏教の大先覚者であります。その東北教化については文字史料には明徴と欠きませんが、「大師伝」に「天長六年（八二九）以後、北秋に向かい、妙法（法華経）を宣揚す」と見えます。しかしながら、当山への巡錫は、大師が入唐求法し、聖地五台山の巡礼から帰国して密教を伝えてからのことであつたでしょう。中尊寺には現に開山慈覚大師の秘法が今に伝えられており、古来これが当山の修養階梯の必須行法とされております。寺室の紺紙金銀字一切経と経蔵の本尊騎師文殊像に、遠く五台山の宗風が投影されておることも併せ考えられることであります。寺伝は、それを嘉祥三年（八五〇）のことと伝えております。

これより先、大師は自ら法華経一部を書写し、比叡山の横川如法堂に納められました。これが後に盛行する如法経のはじまりであります。ここをもって思うに、大師ないしはその門弟によつて開山々頂にも如法堂が建立されたことでありましょう。それは、後年奥州藤原氏初代清衡公が最初に多宝塔を建立されたことに照応し、多宝塔が如法堂と対の形になつたものと、遡つて想定されることであります。当寺が「経山」たる寺観、法灯とする所以であります。

明年は、すなわら開山より千百五十年の吉辰にあたります。日本人の美と信仰の遺室に接して、ひとり一人がこころを御尊仏に繋いでいただきたく、あわせて、当山においては新「讚衡蔵」の落成を記念し、秘仏一字金輪仏頂尊御開帳はじめ装飾経の美展等々、諸催事を企画した次第であります。

願わくば 此の功德を以て 普く一切に及ぼし

我らと衆生と皆共に 仏道を成ぜんことを

平成十一年五月二十八日 中尊寺

中尊寺（時報）「関山」第六号

平成十一年（九九九）十一月十一日

発行 中尊寺

（執事長 菅原光中）

〒〇二九一四一九四

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷（株）

# 中尊寺開山千百五十年祭

期間 平成12年4月20日～11月10日

行事名	期間	時間	会場
<b>秘仏御開帳</b> 一字金輪仏頂尊 坐像	全期間中	8時～17時	不動堂
<b>法話と映像</b> (予約制) 昭和25年の学術調査から50年特別上映「藤原氏御講体調査記録」映像20分／法話10分	全期間中	10時 14時	本堂
<b>新「讚衡藏」企画展</b>	全期間中	8時～16時30分	新・讚衡藏
<b>慈覚大師鑽仰書道展</b>	全期間中		本堂
<b>法華経一日頓写経会</b>	6月11日(日)	10時～15時	本堂
<b>山家学会</b> (招致) 一般に開かれた仏教学会	6月17日(土) 18日(日)	12時～17時 9時～12時	ホテル武蔵坊 ホテル武蔵坊
<b>金字般若心経写経会</b> 郷土芸能奉演	9月23日(土) 9～10月の日曜日	10時	本堂 境内

行事名	期間	会場
<b>開闢法要</b>	4月20日(木)	本堂
<b>慈覚大師報恩法要</b>	5～10月、毎月14日(8月は24日)	本堂
<b>開山千百五十年 慶讃大法要</b>	7月14日(金)	本堂
<b>法華経不断説誦</b>	7月22日(土)	本堂
<b>結願法要</b>	11月10日(金)	本堂

協賛 平泉町・平泉町観光協会

〈発行 中尊寺〉